目次

法華經の一偈一句……本多日生
御恩賞祝賀會記事……
○東京統一團本部ニ於ケル祝賀會　○京都妙滿寺ニ於ケル祝賀會……
知法思國會第三回懇談會……
教報……

第三十四年一月號

東京統一團本部ニ於ケル

本多猊下天盃御下賜祝賀會

四月發行　本多日生著

信仰修養、思想より論じたる

日蓮主義の本領

定價金貳圓五拾錢
五二一八頁
【送料十二錢】

目　次（總の部）

一、信仰と修養と思想
一、信仰修養思想と立正大師
一、敎育勅語の解釋と應用
一、思想の基準

（信仰の部）

一、眞の佛と眞の我
一、信心と正憶念
一、菩薩行

（修養の部）

一、新時代の婦人の修養
一、佛敎の六善事
一、日蓮聖人の人格

（思想の部）

一、國と人と敎
一、東洋思想の大共通點

以上

右は中央出版社の發行なるも統一發行所へ申込まるれば二割定價より割引する事となれり希望者は統一發行所へ申込まるべし

法華經の一偈一句

一、緒　言……一
二、開顯の智眼……三
三、信行に關する名句……六

本多日生

一、緒　言

法華經は全部で八卷あり、これに開結二經を加へれば十卷である。これを法華の三部と稱して居るが尙ほその他に、一切經中に於て法華部に屬する經は重譯の經を合せて五十八卷ある。尙ほその法華部に加へられて居ないお經でも、內容から考へて法華部の中に入れて宜からうと思はれる經は澤山ある。今の五十八卷の經は天台智者大師などの考を根本にして天台學者が編入したものであるが、自分が一切經を研究した上から考へると、法華部に屬する經はモット〳〵その數が殖えて宜しいと思ふ。左樣に澤山のお經はあるが、併しその中で大事な所と申せば從來は方便品と壽量品、壽量品の中に於てもお自我偈が宜しいといふことになつて居るのである。無論それは日蓮聖人のお定めになつたことであつて、その通りに違ひないが、今後だん〳〵複雜な社會になつて行くに就ては、必しもお自我偈の全部を讀まなければならぬといふこともない。又法華經を開顯すると言つて、壽量品の經意を基本にして前後のお經

を見れば、どれも同じ深さの意味になつて來るのである。今後はその開顯の意味を能く心得て、さうして法華經の一偈一句を受持するといふ事がだん〳〵盛になつて行くであらうと考へるから、そこで『法華經の一偈一句』と題してその點をお話して見たい。

法華經はその一偈一句を受持して宜しいといふ意味合のことは『法師品』の中にハッキリお示しになつて居る。『一人の爲に法華華の乃至一句を說かん』といふ語もあり、又『若し人有つて妙法華經の乃至一偈一句を聞いて一念も隨喜せん者は我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を授くべし』といふことがある。一偈一句を受持する者には阿耨菩提の記を授ける、即ち佛に成ることを許すといふことも說かれて居るのである。だから法華經は必しも長いお經を讀まなければならぬことはない譯である。一偈一句といふのはどれだけを讀むかと言へば、一四句偈と申して四句を一偈と言ふのである。五字一句のお自我偈のやうな所であれば、一偈は即ち二十字である、四字の句であれば十六字が一偈といふことである。又偈でない長行の部分であつても、十五字なり二十字なり、その位の長さの所を選んで、それを讀んで宜しい譯である。唯だそれを讀むに就ては、壽量品の經意を基本にして法華經の全部を見るといふ、開顯の智眼といふことを能く考へて置かないと、此品彼品にある經文を引いて來る時分に、その意味が淺くなつたり、邪道へ行つたりすることが出來るのである。その點は最初に明確に意識して置く必要がある。それを從來は一部唯本と言つたりするのであるが、法華經は迹門本門と別れて居るけれども、法華經一部を唯だ本門の見識を以てこれを觀るとか、いろ〳〵さういふ術語があるが、要するに一番深い意味合を押へて、その意味合で他の淺い所も皆な引上げて深い意味にして考へるといふことでないといけないのである。

それはどんな問題があるかと言へば、いろ〳〵の問題があるが、殊に佛樣のことに就て壽量品では釋尊の絕對が說かれて居る。それが化城諭品あたりに就て考へれば、十六人の菩薩の一人で十六番目の方がお釋迦樣に成られた、兄弟が十六人ある中の末子である、さうすると十五人は、お釋迦樣よりも兄分の偉い人があるといふ風に見える譯である。或は普門品を讀んで、『念彼觀音力』といふ經文を讀んで行き居ると、お釋迦樣の有難い事が横道へ行つて、觀音樣が有難いといふ風に考へられて來るのである。さういふ考へ方は皆な壽量品の深い意味を忘れた時に出て來るのであるから、いろ〳〵の經文を採つて用ひる場合に於ても、その意味を一轉して、深い壽量品の意味を加へてこれを觀るといふ、開顯の智眼といふものは曇らぬやうにして、一偈一句を應用するといふことにならないと、混線をしてそこに間違ひが起る。昔はさういふことを禁じて居るのであるけれども、今後の人間はだん〳〵賢くもなるから、一度ハッキリとその事を敎へて置けばさう後戻りはしないだらうと思ふ。

二、開顯の智眼

そこで先づ今言ふ開顯の智眼といふことをハッキリして置かなければならぬ。これは他の語で言ひ表せば「依義判文」と「依文判義」といふ二つの格があつて、依義判文といふのは、深い方の義理に依つて、淺い意味の經文でも深い義理を加へてこれを判斷して行くといふのである。さうすると壽量品の深い義理を始終頭腦に置いて、迹門にあらうが、その他の所にあらうが、それだけでは淺い經文でも、これに深い義理を加へてその文章を判斷するのである。一例を申せば譬諭品に『今此の三界は皆是れ我が有なり』と說かれて居る、この天地宇宙はお釋迦

樣が支配なされて居ると說いてあるけれども、その
お釋迦樣が今度天竺に出て、悉達太子であつた方が
始めて佛に成られたとするならば、その佛に成られ
てからは三界が我が有といふことが言へても、その
數十年前はお釋迦樣のものではなかつた、「つゝこの
間からさういふ事を言はれるやうになつたのだ」……
……斯ういふことになつてしまふから、時間の上に於
てその「我が支配」といふことが非常に短いもので
ある。ズッとその前になると「我が支配」ではなか
つたといふことになる。それを壽量品の本佛といふ
意味を加へてこの文を應用すれば、我が支配といふ
ことは始無き以前よりの支配であるといふことが明
瞭に出て來るのである。總てさういふ風に淺くある
意味の經文でも、深い壽量品の義理を以て判斷する
のである、それを依義判文と言ふ。

それから依文判義といふのは、壽量品のやうに經
文それ自らが深い意味を說明するのであるから、『我
れ佛を得てよりこのかた、經たる所の諸〳〵の劫數は
云々』といふ風に、本當に本佛の意味を說き表はし
てある文は、その文の儘に義理を考へれば宜しいか
ら、文に依つて義を判ずると言ふ、即ちその經文の
上に歷然と現れて居るものである。それを『眞實の
依文判義は本門壽量品に限る』と日蓮聖人が遺文の
中に仰せられて居るのである。この依義判文、依文
判義といふ關係を知つて居つて、提婆品を讀まうが
普門品を讀まうが、壽量品の義理で行けばそれはモ
ウ變つてしまふのだといふことを何時でも頭腦に有
つて居らなければ、開顯の智眼といふことにならな
いのである。

それが日蓮聖人の法華經觀の上に於て一番大事な
問題になるのである。それを忘れて法華經を弘めれ
ば、今の雜炊法華のやうなことになつて信仰の中心
が動搖をするのである。それでは日蓮聖人が命に換
へて法華經を擁護せられた意味が消えてしまふ。そ
んな雜然たる中心を失つたやうな法華經で行くなら
ば、日蓮聖人を俟たずして、その以前に奈良朝時代
などにも法華經をやつて居る人はあつた、それは皆
バラ〳〵の意味でやつて居つた。陀羅尼品を讀めば
鬼子母神樣が有難いとか、普門品を讀めば觀音樣が
有難いとか、提婆品を讀めば唯だ女人の成佛が出來
るとか、何で成佛するかわからぬけれども、唯だ女
人が成佛したといふことの書いてある提婆品が有難
いといふやうなやり方であつた。さういふことは洵
に幼稚な思想であつたといふので、日蓮聖人に依つ
て悉くさういふ思想は斥けられて、壽量品を中心
にしたる法華經觀が成立つたのである。尙ほ『開目
鈔』に

『一切經の中に此の壽量品無くんば天に日月なく
人に神なく國に大王なく山河に珠なからんが如
し』

と言はれたのである、その壽量品の經意の深い意味
を常に考に有つて行くならば、如何なる所にある
一偈一句でも、その意味を應用して行く上に差支の
ないことになるのである。

ところがこの事をあまりに氣遣つて、どこ迄も○
量品の經文だけで行かなければならぬといふ式を、
今までは大分永い間日蓮門下に於てもやつて來て居
るやうであるが、それは甚だ不利益なことである。
無論壽量品で事が足りては居るけれども、又經文の
文句といふものは良い文句が他にもだん〳〵ある。
自分の考では、擴げれば法華經には限らぬ、一切
經の中から良い文句はやはりこれを應用して、而も
法華經の壽量品を中心にしたる思想觀念を以て一切
經の名文名句を應用する、尙ほだん〳〵擴げれば、
佛教の經典でなくとも、世間の書物にある語でも、
文學上の語でも、良い語は採り用ひて、將來新し
く佛教の讃美歌を作るといふ人があるならば、基督
教の讃美歌の文句でも、壽量品の經意に合するもの

は、執つて以て信仰の培養にして宜しい、斯ういふ考へを自分は有つて居るものである。昔はさういふことを非常に懸念して恐れて來たのであるけれども今後は人間の理解が發達する上に於て、さういふ間違ひは左程に心配することはないと考へるのである。

三、信行に關する名句

そこで信行に關する一偈一句としての要文を摘出してお話して見たいと思ふ。これも中心は壽量品に基いて、隨喜功德品に現れて居るところの初隨喜の信念といふ、壽量品の有難いことに關して信念を起すのが宜しいといふことになつて居る。それに違ひないのであるが、その意味を放さずして考へて來れば、法華經全部に亘つて有難い經文が澤山あらうと思ふ。その他の場所にある經文だからと言つて、その意味が違つたやうな應用をするといふやり方は、將來改めなければならぬことは、只今までに申した所で明かであらうと思ふ。

先づ信仰に就ての中心の思想から申せば、やはりお自我偈の中にある

一心欲見佛　不自惜身命
時我及衆僧　俱出靈鷲山

（一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず、時に我及び衆僧俱に靈鷲山に出づ）

といふこの四句一偈が、信仰の上に於て最も有難い感激多い經文であると思ふ。さう長いお經を讀む暇の無い時には、精神を鎮めて、斯ういふ經文を讀んで、さうして南無妙法蓮華經と三遍五遍唱へるといふことで、それで宗教の修行の形式は宜しいのである。又さういふ風にして行くことが今後非常に活き〳〵した信念を喚起すのではないか、唯だ何でもそこへ坐つたら『自我得佛來……』から『……遠成就佛身』まで全部讀まなければならぬやうに思つて、半分坐睡をしながらムニャ〳〵とやつて居る氣の拔けたやうな舊式のやり方は改めた方が宜くはないか。熱心に長い時間やれる者は無論差支ないのであるけれども、唯だ型ばかりになつて行くと、どうしても價値が無くなつてしまふのである。

そこでこの經文の意味はどういふのかと言へば、『一心に』といふことは心の散乱しないことである心の統一すること、心が一定して落着いたことを申すのである。心が散つて居つてはいけないから、心を鎮めてさうして佛樣を見奉らうと欲する心、それは佛を憧れる精神である。この佛樣は實に有難い方で、何もかも揃うて居らせられる、その渴仰の心は佛樣の慈悲に就ても、さとりに就ても、力用に就ても、お相に就ても、あらゆる事柄に就て、佛樣の尊さを考へたその心の纏りが、一心に佛を見奉らんと欲すといふことに現れて來るのである。佛樣が有難いやうな、有難くないやうな、見たいやうな、見たくないやうな……といふその惚れ方が足らぬ間は駄目ナンである、戀慕渴仰の心といふものが燃え立つて行くといふことが信念に於ては一番大事なことである。これは理窟でもなく學問でもないのであつてその人の清き情操といふものが大事である。宗教はどうしてもその清き情操感激の精神にあるものである。さうしてその結局は自分の命をも惜まないといふことになる。さういふ信念の無い人は、命を惜まぬといふのは大きな事だ、大變な事だと思ふけれども、人間の本當の渴仰の精神から言へば、無論小さな自分の命ナンといふことは問題にならないものである。それは男女の關係などに於てもさういふことになる譯で、戀愛關係ナンといふものを書いて居るのを見れば、死といふものは怖い間は本當の戀愛の成立でないといふやうなことは、彼等が筆を揃へて皆な書いて居るのである。併しそれは男女の戀愛ば

かりではない、忠臣が君國を思ふといふことでも、「君は思ふけれども生命は惜しいのぢや……」と言つた時には、本當の忠愛の觀念になつて居ないのである。藝術などでも愈々それに熱中して居る者は、やはり生命を超越して居るやうである。景色が非常に美いといふので、上野の山の紅葉の枝に頸を吊つて死んだ藝術家もあつたやうであるが、そんな事をして死ぬのは宜しいとは思はぬけれども、それはやはりその事に憧憬の精神が滿ちた時、死といふものは問題でないといふことがわかるのである。古來あらゆる宗教の信念を表はして居る人は、どの宗教を問はない、その熱心の表現は死といふものを超越して居る所に出て居るのであるから、そこまで行かないものは本當の信念ではない。

併しそれが難しさうだからと言つて怖がる必要はない、愈々となればその決心は出て來るのである。愈々絶對絶命となれば、やはり人間は死を超越して信念に活きることが出來る。それはどんな忠臣でも何でもない時分にむやみに死なうと言つても死なれないけれども、愈々一大事といふ時になれば、即ち死の覺悟といふものが直に附くのである。だから宗教の信念がさういふ意味合のものであるとして訓練されて居る時には、やはり身命を惜まずといふ所に至るものである。それは日蓮門下の先輩に於て言へば、四條金吾であるとか、或は婦人でも乙御前の母であるとかいふやうな人は、皆な生命を超越して居ることが能くわかつて居る。又吾々が實見して居る信者の人でも、少し熱心な人は、男でも女でも、愈々の大事といふ時になれば、決して死を恐れないものである。日蓮聖人のお弟子の熱原甚四郎の如き、南無妙法蓮華經の信仰を改めないといふので、弓で射殺される場合に、矢が一本身に突き刺さると「南無妙法蓮華經」と唱へ、又一本突き刺さると「南無妙法蓮華經」と唱へて、遂に射殺されたけれども、

その息の根の通はん間は南無妙法蓮華經と言つたといふ所が、『實に一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず』といふことを事實に現したものである。この句は洵に宗教信念の極致妙處を言ひ表して居る結構な語である。

左樣に熱心なる信仰を有てば、そこに『我及び衆僧俱に靈鷲山に出づ』で、佛樣の方に於てもその者を迎へにお出ましし下さつて、直に手を取つて靈山淨土に導き給ふといふことになる。この四句一偈の如きはその意味を能く心得て唱へて居れば、自然に自分の心がさういふ風に引立てられて行くのであるから、この經文を讀んで續いて南無妙法蓮華經と唱へれば、そこに信念が燃え立つて行くのである。

それから同じお自我偈の中でもズッと先に

我亦爲世父　救諸苦患者

（我も亦爲れ世の父、諸の苦患を救ふ者なり）

といふ二句がある。お釈迦樣は世の父と仰しやるので、この世に生れて居る吾々の爲の親として、吾々の諸の苦しみ、憂を救うて下される譯である。この苦しみ、憂ひを救ふといふことが宗教に於て又大事な所である。現在生活の上に於ては、人生にいろいろな嫌な感じが起る、或は生活の爲に、或は病氣の爲に、或はその他の人事上の出來事の爲に、如何にも嫌な心持のする苦患といふものが起る、それを宗教の信念に依つて救うて貰はなければならぬ。確にお釈迦樣は世の父、諸の苦患を救ふものであると言はれる、お前等にも優しい所のお父さんがあらうけれども、それは力の足らない親である、お前等の一通りの事は世話をするけれども、人生の深い苦しみ惱みに於ては、汝の父はこれを救ふことが出來ない我はそれよりも深い強い意味に於て汝等の苦しみを救ふところの父である、肉體の父は汝等皆な持つて居るが、精神の父として我は汝等を救ふものである

と言はれた。斯ういふ語を心から唱へて行けば、信念を鼓舞することは強いものであると思ふ。

その次にお自我偈の結文である『毎自作是念』の文がやはり非常に宜しいので、

毎自作是念　以何令衆生
得入無上道　速成就佛身

（毎に自ら是の念を作す、何を以てか衆生をして無上道に入り速に佛身を成就することを得せしめんと）

お釈迦様は何時でも我を救はうとしてお考へ下されて居る、どうぞして救ひたいといふ慈悲の御心は慈む暇無きものである。こちらは或は眠つたり、他の事を考へたりして忘れて居るけれども、佛様の大慈悲は如何なる場合にも吾々の上に冠さつて、どうぞして救つてやりたいといふその慈悲の温味は自分の上に蒙つて居るものである。この感應の有難い事を常に信じて行かなければならない、基督教あたりでは聖霊の感應といふことを言うて居るが、佛教でもその意味は無論教へられて居る。併し基督教はその點を強く打込んで居る、聖霊の感應といふのは、即ち神様の吾々を救つて下されるその力が自分の心に映つて來る、その映つて來るのが或る時などはポッと温く感じて來ると迄で言うて居るのである。そこまでは行かぬにしても、一心合掌して頭を低げて居る時には、佛様の慈悲の光なり温味が自分の身の上にハッキリと感應ありといふことを信じなければならぬものである。唯だ何の感じも無く「毎自作是念……速成就佛身」カーン……、斯ういふのではどうも面白くない。何時も〳〵さういふ良い工合には行かないけれども、良い工合に行くのが原則であつて、出來損ひの所謂粃が多いといふことを反省しなければならぬ。それを粃でも何でも數が多ければ宜いと言つて、實の無い粃の籾ばかり三斗も四斗も貰つて來て喜んで居る、さういふ風に唯だむやみに經文を

澤山讀むのを善いとして今日まで來たことは、佛教が力を失ひ、効果を失ふ所以である。どうしても宗教は精神的のものであるから、徒に長い時間を要求する必要はない、精神の統一をしたその熱誠の籠つたものは、寧ろ短い時間しか續き得ないのが人間の心理狀態であるから、その短い時間に於てそれが徹底するやうに、さうして本佛との感應が鮮かにそこに來つたといふことを自分にちやんと意識しなければならぬ。

これは日蓮聖人も受持修行の場合に於ては「毘尼薩」といふ語が聞えるまでやらなければならぬと言はれて居る、恰度基督教に於て聖霊の温味を感ずるといふやうに、本當の信念のそこには毘尼薩といふ語が聞える。毘尼薩といふのは梵語であつて、罪が滅びるといふことである、「汝の罪は赦されたり」といふ許しの聲を聞くまでやれといふことがあるのである。法華部の觀音賢經に依つてもやはりさういふ意味があつて、それは眼を瞑れば佛様の實在といふことを信じ、佛のお在でなされる意味がわかるけれども、眼を開けるとそれが見えない、如何にも情けないことである、どうぞ眼を開けても見えることになりたいといふことを願つて居る。自分は必しも眼を開けて佛の相が見えるのが善いとは思つて居ないけれども、お經の方ではそこまで言うて居るのである、眼を閉づれば見える、眼を開ければ見えない、今まで信念の上に見えた佛が眼を開ければ消えてしまふ、情けない事だと經文にある。そのやうに聖霊の感應と同じやうな意味は佛法にも說かれて居るのである。要するに餘りに信心修行といふものが形式化のみして行くことは面白くない事だと深く自分は感ずるのである。何時でも掌を合せて頭を低げれば佛様の來臨影響と申して、そこへチャンとお在で下されたナといふことが自分の心に感ぜられるやうにならなければならぬと思ふ。

それはどういふ方法でも宜しいので、その人の工夫に依つて感ぜられるやうになる。例へば自分の子供を想出すとか、夫を想出すとかいふやうなことでも、その人の寫眞を出して來れば想出すとか、その人が或る場合に寄した手紙を出して見てその當時を想出すとか、斯ういふ場合に言うた言葉が優しい言葉であつたとか、嬉しい言葉であつたとかいふ事を想出すと、その人の顏が見えて來るといふことがある譯である。さういふ風な意味でお自我偈にある今の『每自作是念』の經文や、さういふ有難い經文を讀むことに於て、あり〳〵と佛樣が自分に意識されて來る、斯ういふことの必要に於てお經といふものはあるのである。さう長たらしい手紙を全部讀まなければ想出せないといふことは無い、その手紙の中に非常に感激するやうな所がある、そこに圈點を打ちたいやうな所がある。その圈點を打つ所を繰返しさへしたならば、その夫を想出すとか、子供を想出すとか、或は友人の手紙に依つて友人を想出すといふことがあるが如くに、本佛釋尊の說かれた法華經の中に朱點を打つて、そこに感激を起す所を拵へて置くといふことが大事ナンである。何も長たらしい手紙を「一筆啓上」から終りの「匆々頓首」といふ所まで、全部諄々と讀む必要はないのである。お經といふものは切めから終まで全部讀まなければならぬといふことはない、それは或る場合に一遍讀んで置けば宜いのであつて、朝晩の動行などに讀むのはその朱點を打つた所を讀めば宜しい、即ち一偈一句を受持するといふことで宜しいのである。

先づお自我偈に就ては以上の三箇所の文が最も宜からうと思ふ、これに限るのではないが、さういふ所を拜誦すれば、全部を讀まなくても非常に感激の多い事であると思ふ、斯ういふ讀方が將來は廣く行はれて宜しいと自分は思ふのである。

次に『分別功德品』の中に信念に關する經文がある、それは深信解相の文であつて、この壽量品を聞いて本佛釋尊の實在を信じ、それに就て深き感激を有てば、それがその信念であり、その信佛敎の一番深い所を領解したことになるのである。その意味は經文には次のやうに說かれて居る、これは少し長いやうであるけれども、前後の意味を明瞭にする爲に引くので、實際に讀む場合にはこの中を短くして讀んで宜しい譯である。

若善男子　善女人　聞我說壽命長遠
深心信解　則爲見佛　常在耆闍堀山
共大菩薩　諸聲聞衆　圍繞說法

（若し善男子善女人我が壽命の長遠なるを說くを聞いて深心に信解せば、則ち爲れ佛常に耆闍堀山に在しまして大菩薩諸の聲聞衆の圍繞せると共に法を說きたまふを見ん）

これは佛が何時もお在でなさるといふことをお說きになつたのを聞いて、その佛が實在といふ意味合を深心に信解する――この深心といふこともさう面倒な事を言はなくても宜しいので、心の奥からといふやうなことである、表面の心でなく、心の眞底からその意味合を有難いと考へて、さうして佛樣は何時でも此處にお在でになつて法を說いて吾々を導いて下されて居るものであるといふ、佛の實在を信念することが大事ナンである。その深心信解といふことを常に心に離さぬやうにして行くことが信仰の大事な點であるから、斯ういふ經文を讀んで居れば、法華の信仰が邪道に墮ちることは無い譯である。

又これの續きとして起つたのが『隨喜功德品』であつて、それに依れば法華經の信心といふものは、唯だ壽量品を聞いて一念隨喜の心を發すといふことである。一念隨喜といふのは、お釋迦樣が何時も護つて下されて居る、尊い方であるといふことを有難く感激する心、それを申すのである。敎へられた通

りに自分の精神を委せて、さういふことを說かれても「どんなものだらうか」といふ疑を加へないで何時も護つて居るのだと言はれた言葉を眞に受けて辱けないことだと素直に感激するのが隨喜の心と申すのである。その一念の隨喜を發せば廣大なる功德を成就するといふことを說かれた一節が非常に宜しいと思ふ、隨喜功德品の全品が殆どさういふ語で出來て居る。

さうしてその隨喜が五十展轉の隨喜と申して、始めて說法の座で聽いた人の感激は非常に深いが、その人が話をして他の人に傳へ、又その人が他に話をするといふやうに、五十人それが展轉して行つた、その五十人目の人が聽いた時には、最早や他の人に話すだけの力も無くなつたくらゐのことだけれども、それが廣大無邊の功德を成就するといふことがある。

最後第五十　聞一偈隨喜

是人福勝彼　不可爲譬諭
（最後の第五十一偈を聞いて隨喜せん、是の人の福彼に勝れたること譬諭と爲すべからず）

第五十番目の人間が、僅に前に言ふお自我偈の一偈を聞いて――一偈と言へば四句一偈であるから、その四句を聞いて隨喜するその功德が廣大無邊であつて、「譬諭と爲すべからず」といふのは、前はいろいろの善い事をした善根の實例を擧げて詳しく說かれて居るので、それにも尙ほ勝るといふことを申されて居るのである。

斯ういふ經文を本當に理解して居つて讀めば、いろ〳〵の善い事を世の中でして居るけれども、それよりも吾々の本佛を信ずる信念は更に廣大な功德を成就するものだ……斯ういふことになるから、信心がそれだけの策勵を受けて、信心の有難いといふことが自分の力を維持して行くことが出來るのである。說敎を聞いて唯だ附燒刄のやうな工合に、有難いことを吹き込まれた熱で辛じて持つて居るのは、その熱が散すると又もとの氣拔けみたやうになつてしまふ、それでは駄目である。自分自身で信念を培養し、策勵する力を持つて行かなければならない、今までのやうにむやみに他人に委せる信仰、仲買人に委せて居つたやうな信仰は宜しくない。何時の時代でも宗敎がさういふ風になつた時、その宗敎は價値を失つてしまふのであつて、必ず自分自らが信心の心得も定め、その信念の弱るのを賴つ方法も知り人手を藉らずして自分でやつて行けるやうにならなければならぬ。花活けが一人で出來るやうになるにも、やはりいろ〳〵の花に就てそれ〴〵その恰好をも心得、又水上げの方法も知つて居り、大抵のものは自分でやつて行けるやうにならなければ、「こんな花を貰ひましたけれども、これをどういふ風にしませうか……」一々先生を呼んで來なければ活けることが出來ない、先生が留守であつたから花が枯れてしまつたといふのではいかぬ。どうか斯うか家庭でも先生の手を離れて花が活けられるといふに就てはそれだけの方法を併せて知つて居らなければならぬ譯である。信仰といふものもさう何時も〳〵先生の手を藉らなければ繼持が出來ないやうな信仰は、將來價値がなくなると思ふのである。

そこで斯ういふ善い經文を拔書をして覺えて行くぐらゐの事はさう骨は折れない、長くて二十字ぐらゐであるから、これをズッと書附けて置いて、さうして良い節を附けて讀む、その讀方なども必しも一定しては居ないのであるから、お互に美い聲で讀む研究をして、好い工合に調子を附けてやつて行つた方が宜い、變な陀羅尼聲でやらなければならぬことはない。このお經を讀む聲のことなども、日本佛敎は十分に研究されなかつたと思ふ、叡山あたりでは餘程美い聲でお經を讀んだものであるけれども、だ

ん〳〵墮落してお經の聲が低級な狀態に陷つたと思ふ。殊に法華宗のお經の讀方はどうしても改善しなければならぬ程度のものである、自分でやつて居るとそれはわからぬけれども、傍から聞いて居つて煩く聞える。「法華の信者が隣に轉宅して來た、煩くて仕方がない」……人が聞いて煩いと言はれるやうでは宗教の儀式といふものは價値が無いといふことがわかる。「隣の家に何だか知らぬが信者が越して來た實に美い聲で、文句はわからぬけれども氣持が良い宅の女房も一つあんな事をやつて呉れゝば宜いが」……といふ風にならなければならぬものである。さういふ點が餘程將來重大なことになると思ふ。

羅什三藏が法華經を飜譯する時分には、さういふ風に美い聲で唱へられないやうな文句は悉く除いたといふことを羅什自ら書いて居る、吾々は漢文のお經の本當の讀方を知らないので、唯だ日本の癖附いた讀方をして居るのであるが、これが本當の支那音の發音になれば、「青島」と書いても「チンタオ」と讀んで居るやうなもので、さういふ音の關係から行くとこれが非常に好い調子が出て來るのであらうと思ふ。そのもとの發音を捨てゝ日本流儀に讀むものであるから、むやみに抑へつけたやうな言葉になつてしまふ、さうしてお負けに強い調子で唯だ一律にズッと押切つたやうな讀方ばかりやつて行くから洵に拙いことになつて居る、モッと抑揚があつて、聞いても心持の良いやうに經文はあるべきものである。尤もお自我偈の訓讀などに就ては、吾々永い經驗に於て、上手な人の讀んで居るのを聞くと非常に工合の色いものであつたが、この頃はだん〳〵下手になつて來たやうでやる、普通の坊さんが讀むのでも自分等が小僧の時分に知つて居る名僧でお經の上手な人だと言はれるやうな人が讀んで居つたのは、如何にも聞いて居つても氣持が良かつたものである。自分はどちらかと言へばお經を讀むのは上手な

方ではないが、それから見るとモッと下手な者が澤山出來て居る。さういふ點を考へても、讀經の方法なども餘程頽廢したものである。これは反對にだん〳〵改善して良くして行くといふ努力をしなければならぬ。諸君の中には聲の美い人もあらうし、さういふことに興味を有つて居る人もあらうから、だん〳〵美い聲を覺えて行き、尙ほ上手な人が敎へて行くやうになると、そこに集まる人々のお經が上手になる。だから土地に依つて違つて居る、東京邊りは大体下手な方である、同じ信仰團体でもお經の上手な土地がある、東北の盛岡邊りはなか〳〵上手である、何も盛岡人がさう聲が美い譯ではないけれども敎へる先生に良いのがあつて、それからそれへと傳へて行くから非常に調子が好くなつて居る。京橋の柴田といふ家の奉公人が約百人あるが、感心なことに皆お經を敎へて居る、主人は孫にお經を讀めないのであるから、その奉公人の中の頭分が先になつてやるのであるけれども、少しも先生無しに素人ばかりでやつて居るので、訓讀と言つても洵に調子が惡い、そこで或る時私がそれではいかぬと言つたところが、忙しいのに大勢が揃つて私の寺にお經を習ひに來る、それは店の仕事の妨害にならぬやうに朝早く起きて主人も支配人も小さい奉公人もぞろぞろやつて來て、一生懸命にお經の調子を習つて歸るのであるが、私は感心して居る。一度さういふ話をした事を直に實行して居るので、さういふ心懸けの良い人も東京に居る譯である。それでやはりお經の調子といふことは大事なことで、その聲の調子に依つて信念も引立つて行くのである。（次號完）

× × × ×

本多日生猊下 御恩賞祝賀會記事

○東京統一團本部ニ於ケル祝賀會

昭和三年十二月十六日第三日曜は前日の冷霖あがつて氣持ちよい日本晴れ、そこには推積の纖埃が淨化され爽快な所謂天晴地明、しかも無風で暖かいお祝には實に相應しい惠まれたよい日であつた。象て「統一」十二月第四百五號の豫告通り午後四時から次の式次に依て　猊下祝賀會が擧行された。

差　定

一、一　同　着　席
二、讀經　聖壽萬歲御祈念
三、祝辭　統一團代表、來賓、其他
四、記念品贈呈
五、猊　下　答　辭
六、萬　　歲
七、祝　　宴
八、餘　　興

和氣藹々の野口及鈴木權大僧正始め、喜色萬面の佐藤中將、矢野及岩野閣下や山田博士、小林先生等を筆頭に幾多の名士、團員と否とを問はず來り會する者がさしもの聖堂に溢れた。其處には一種の靈氣遍滿し、各自は異常の緊張裡に莊嚴な虔脩訖り、直ちに祝辭に移つた。劈頭に統一團代表として佐藤鐵太郎閣下が登壇され左の意味の祝賀所感をお述べになつた

此度　本多猊下へ　お上よりの御沙汰は我等一同の嬉しく思ふ所でありますが、さて第一にどういふ事を申上げてよいかと迷ひました。

不圖思ひ出したのは、先日友人が參りまして自分の子供が二三日前から感冒に悪つたが、妙な事もあるもので、平常頼むお醫者に來て貰つた處が子供は逃げ走つて本箱と本箱の間にかくれてしつたのですそれではいけないと色々瞞したり敎へたりして漸く診察を請けさせましたが、さてお醫者の歸る時にはハイチアイをやつた、妙なものだといふ話しです。それで私は思ひました、猊下から私は敎を稟けて廿餘年になりますが、猊下はもつと以前から、吾日本國家を救ふには　日蓮聖人の敎に如くはないと思はれて各所へ隨時巡回されて、敎へたり或は訴へても見たり、或は強く或は軟かく、夫々適應した布敎をされたが、世間の中には此の正善の師匠から逃げかくれした者があつた。

それは子供と同じではないですか、けれ共矢張り常に近づき親しく敎をうけてる者は後にはハイチヤイと頭が下がります。妙な事を申すやうですが、此長年月の間に　本多猊下なかりせば我日蓮主義はありますまい、眞の日蓮主義は全く、本多猊下に依つて發揚されました。此時此御大禮に當つて永年御苦勞であつたと、お上のお讃めがあつた其點が心から嬉しいのでありまり。認めらるゝや否といふ事は宗敎家には問題でないが、併し人間である以上矢張り此度の事は嬉しいのであります、今度　御上のお眼鏡で表彰なされたのは實に難有い事で、もう何も申す事はありません、感極まつて申すことは出來ませぬ唯これから又青年に難へられて、世の中又我々をも救はるゝやうお願申したい、どうか一層の御奮闘をお願申す次第であります。お祝の言葉としては不向でありませうが、私の志を以てお祝に代へます。

と、謹嚴な裡にも親み深い閣下の巧妙な譬を以てある暗示を諷諭された時に急霰の柏手は暫く鳴り止まなかつた。

次で、東京僧員代表として、森川日修師は、允文允武なる、聖上陛下は御即位に際し、此度　天杯を下賜されたことを謹でお祝申上ます。顧みるに六百年前、日蓮大聖人の師子吼は、日蓮主義を顯揚され

たが其後時代は之を壓迫ばかりして居たけれ共、幸に聖代に來つて、しかも今回、本多猊下の、天杯御拜領は單に猊下一人でなくして、是は日蓮主義を以て國家を教化し救濟する者の等しく喜びとする所である。

等、此好機を大に活用すべく大抱負あるお祝の辭を謹述された。

次に來賓、小林一郎先生起れて、私は格別こうと申す事はありません、只今、佐藤將軍の仰せの通りであります。一体世間には早く現はれて來るものと遲く現はるものがありますが、早いものは淺く輕いが、遲いものは深く强いものであつて、精神的の感動も其通りであります。私は、香川景樹の歌が嗜きですが其中にこんなのがあります。

皆散りし、あとにをれともみち葉の
淺きは深き心なりけり。

始め早く紅くなつた紅葉より後に殘るもの程大きく赤くなります。國に竭す人は此心でなくばなりますまい。私は學生時代から　本多猊下のお名前は知つてゐましたが、學校を卒つてからかの「法華經講義」を見て各方面から色々註釋されてゐるので、法華經を知ることが出來ました。其後天晴會で始めて教を稟けたのでしたが、猊下よりずつと後に出た人で早く地位名譽を獲られた人が相當ありました、けれ共それは何でもありません、紅葉は散り失せるが、人生の仕事は一秋や五十年で散らない永久に生きて行くものであります。今回の御表彰に對しては、どうか猊下は生き代り生き代つて國家社會に御盡しあらん事をお願ひ申上げます、傳教大師もそう申されてゐる。

此度は日本の　お上から戴かれましたが、やがて此貴い教を幾十年か幾百年後か知れませぬが世界中に廣く弘められた時に、次回は世界の各盟主から、頂かれて、此の通りのお喜びを得らるゝやうにお願ひ申し上げたい。我國の現狀を見ますると、今日は一死以て國に殉ずる者があつて大に救はねばならぬ時と思ひます。私は甚だ勝手ではありますが、お祝ひ申上ぐると共に將來の御奮鬪を偏にお願致します。と、憂國熱誠な快辯を以て、それとなく一同を激勵された。柏手喝采に降壇された後、次の順序に別

揭の祝辭朗讀があつた。

顯本宗學會　山口智光師
大日本妙道會　毛見熊太郎氏（代讀）
大森妙道會　西山喜太郎氏
本郷正道會　伊東竹三郎氏
正法護持會　秋澤吉藏氏
法悅教會　礒部滿事氏

次で　笠塚立正會小西日喜師登壇、開口第一番に今晩の祝賀會は二つある、一は、本多猊下で、一は佐藤閣下である、佐藤中將の勳一等、大にお目出度い事で、來會者一同も皆内心之を慶賀されてゐると信ずる、特に私は先般妹尾君から、閣下の舞鶴司令長官時代に同軍港の人心が　閣下の御人格に依つて一變したといふお話を聞いて强く感激しました。謹でお祝申上ます。次に　本多猊下に就ては來會者一同に貴いお土産を差上げようと思ふ。第一に私の學生時代、播磨會で　辻善之助博士や三上參次博士が種々の話から、適　本多猊下の事に及んだ、處が辻博士は播磨出身では、猊下が第一等の大人物であると嘆賞された事を深く私は腦裏に刻み込まれた。私が岡山時代には鶴鳴館で、猊下の感謝會が開かれた時にも參加して　猊下の御講演を拜聽したが、それは極めて莊重な、引付けらるゝやうな私共を强く刺激されたから忘ることは出來ない。次に播州には曉景禪師といふ禪宗の大和尚があつて私の郷里の近所に大きな寺を建て知らぬ者もない位であつたが、而も　猊下に較ぶればそれは小さいものである。今一つこれは勝手な申分ではあるが皆樣に諮りたい。それは第三の法門である。猊下のお生になつた處も亡ぶことはあらう、寺も燒けることあろう、一切のものは年と共に消失してしまうが唯一つ不朽なものがある、それは著書である。今は殊に圓本時代であるからして、猊下の著書を適當な方法で整理され廣く普及させて頂きたい。猊下に接し感激して現に活動してゐる僧侶に自分如きは物の數でないが、和賀師あり、小泉師あり横山師ありいづれも獨立會堂建設して奮鬪してゐる其力は皆　猊下に發してゐる。

とて或は小林先生の歌に對し、自分もと

はら〳〵と落つる木の葉に交り來て
栗の實一つ土に聲あり。

等、或は　猊下の神田猿樂町時代の悲境を語られ、屢熱涙双頰を濡しつゝ感激の深い感話祝言された。

次で　井上道太郎氏の祝辭朗讀あり。

次に教育會、佐藤智光氏は、自分は本年三月に漸く猊下の知遇を得た者で、教育會では此統一閣を借りて地方から上京の學生を泊めて頂き既に千百十餘名の多きに達してゐる、去る十二月二日にも神戸商船學校の學生三百名がお世話になり大に肝銘してゐた。夫等は皆、猊下の御名に仍つてである。本日は會長の代理として來たので、之と申し上ぐる事もなく皆樣の方で既に御周知の通りでありますと、簡單に挨拶された。

次で　萩野慶三氏の二首あり。最後に

市川立正會　小澤天重氏の自分は十二歳から丁稚奉公で練へ上げたが信仰は其時分から芽生してゐた幸に後に顯本宗學會員の大岩氏方に使はれてから、信仰と商賣を常に訓誡されてゐた爲めに將來も會堂建立に盡したいと、成功と信念の體驗を告白され一同に刺激を與へられた。

終つて各地方からの祝辭祝電數十通をば、梶木師朗讀され、是より記念品を贈呈致しますとの聲に應じて、岩野直英閣下は感儀を整へ、恭しく目錄三寶を捧持され、御寶前數尺の前方で直立不動、重々しく　南無妙法蓮華經の御題目に一同合掌唱和し、やがて、閣下は膝行贈呈の辭を述べらるゝと、猊下は感謝の意を表された。髮の毛が散つても知れる程の靜けさに閣下の退座ある其一擧一動をば肅然として滿目は注視され實は森嚴な場面で、マグネシュムの爆音は輝いた。

やをら　猊下は答辭の爲め拍手の裡に起立された

本日は熱誠なる各の祝辭、又最も尊敬せる佐藤閣下や小林先生其他法友等の諸氏から誠意を込めた祝辭を頂きまして、今更一段と聖恩の無窮に感激する次第であります。

私は思ふ程の働きは出來ませんので、軍隊で申せば伍長か曹長位なものが今度の光榮に浴した事は存外に思つて居ります。

此機會に過去六十二年の追懷を申述べたいのであります、時間が少ないから極く簡單に申したい。六十二年の過去に考へる事は澤山ありますが、先づ恩義のある處を考へねばなりませぬ。

第一には父母の恩德で、私の出家したのも自分がしたとは云ふものゝ、それは父母の許しがなければ出來ないのであります。今度のことも父母が今日居れば、一番强く喜んでくれると思ひます。……（猊下の聲は怪しく曇り、其眼には白い光の滴が電燈に反射し、暫時次のお言葉は出なかつた）

次には師匠の恩であります、兒玉日容上人は其信念に於ても學問等にも宗教家の要素を得て居られた近代珍らしいお方でありました。

私は書物丈けでなく事々物々に就て教へられました、私が正義を維持し、法戰に立つ元氣は、日容上の正義の觀念、護法の熱誠から植付けられたのである故に、今日の事は師匠の喜ばるゝ所であります。

漢學は、西　毅一先生に就ひて、又時代の文教は哲學館等で教はりましたが就中　西先生には大に感謝せねばなりませぬ。

教團に就ては其先輩殊に不惜身命の點では常樂院日經上人に、又學藝の側では日受上人を有する事が多大な難有いことで、開祖日什上人が晩年天臺を捨てられ直ちに經卷相承を以て正義の爲め元氣よく御奮闘なさつた御方針の最も宜しい、此宗脈此宗派にゐることが至極滿足で難有い、而も其學解と信仰と主張に於て負ふ所は甚だ大きなものであります。又日蓮聖人、法華經　釋尊の三寶は申す迄もない事であります。

國家に於きまして洪恩の辱けないのは、私は明治時代に永く送りましたが、我國運の興隆は實に目覺しいもので、それを思へば皇室の大恩は誠に尊い。超國家をいふ宗教家や學者もありますが夫等は正當でなく、自分は正しく其洪恩を感謝出來ることを難有く思ひます。又大師號の追諡もあり、更に今度表彰を受けた以外にも多大の關係あることに就て感謝致します。

社會の恩には、佛教では一紙半錢恩分の面々と云つて、夫を忘れてはならぬと教へられてゐます。一回の講演會を開くにしても澤山の方々の努力に依り又各種の供養を思へば多方面に涉つての恩惠に預つてゐます。此席には私に緣故の深い宗學會の連中も多く見へてゐるのは感謝に堪へませぬ。京都でも深

く感じた事があります。

其外社交の上で啓發された澤山の方々がありますから、此際衷心から感謝し其冥福を祈つて居ます。實に今晩の祝賀は肝銘の多い事であります。等

と、四恩報謝の意義深い感激の御挨拶を短時間に力强くお述べ下さつた。夫は其三四時間前即ち式前階下に於ける日蓮講演の「六十二年の懐顧」と相對して涙ぐましい眞に宗教家、善知識としての眞髓を發揮されたものであつた。

感謝に溢れる一同は起立し、茲に、矢野茂閣下の發聲で兩陛下の萬歲を三唱し、續て本多猊下萬歲三唱の聲は四隣に響いて、式典は目出度終了し、やがて祝宴に入つた。

祝宴、夫はある宗教家は必ず御酒は附きもの、寧ろ食ふよりも飲む方が宴會と思ふけれ共當夜は、本多猊下は禁酒黨隨一の嚴師であるから其御意を躬して酒類一切を廢した模範的の清宴が張られた。淨宴の興を添ふべく、佐藤漢水女史の琵琶や、織原克己氏等の三曲合奏あり、或は琵琶、或は琴、尺八、或は謠曲にと團員の藝人に依つて餘興の華は錦上一段の美を增した。

八時を過ぐる四十分、名殘惜しくも散會された。

當日朗讀されたる祝辭は左に掲かぐるが如し。

奉祝之詞

勞働運動者曰く團結は力也と先哲の曰く正義は力也と

大聖釋迦牟尼世尊示して曰く、法華を成就せんと欲せば正に正定聚に入るべしと

宜なる哉、異体同心の祖訓、最に我等を警策せらるゝことよ抑我統一團の運動は正法正師の正義弘通の擁護に起る、明治廿九年、時運に會して佛教各宗協會は新に佛教各宗綱要の編輯を企つ

日蓮法華宗又其の綱要を編まざるべからず、此の時に當りて先に宗門の改革の運動に依り異端者として宗門より擯斥せられたる本多日生上人は、反つて宗門當局の乞に依り、入りて小林日至上人と共に其の編纂の任に當らる、法華折伏破權門理の鋭鋒殊にするどし、

協會の當時者大に驚き、卑怯にも其の規約に反して四箇格言の一條を削除す、何ぞ默することを得んや、大いに其の非をなじると雖言を左右にして之を容れず此處に於て本多小林兩上人は奮然として立ち同志と共に各所に學術講演會を開き或は統一團報を發刊し或は法廷に立ちて正義を叫ぶと雖時未だ順ならず、

同志の努力團員外護の熱誠も遂に空しく、法廷は其の審理を破却す然も何ぞ此の事に止まんや、

更に益々而强毒之の鼓音は高く、縱說橫說三十有年教化は昔く、日本全土に蒙る猊下の獅子吼せらるゝや宛ら大將軍の自ら陣頭に立ち鞭馬を躍らし白刃を閃かして敵陣を潰滅せしむるが如し我等は其の背後に從ひて唯々及ばざるを之懼る。

謹而惟ふに先きに立正大師の諡號宣下あり更に聖天子即位の大禮に當りて勅語を賜ひて特に教化の醇厚を寔念せらる優渥誠に篤し總裁猊下法動の表彰は又之我統一團事樣の表彰なり我等の歡喜惜く能はざる所なるのみならず、苦節殉教の先輩の歡悅滿足する所ならんか、今や遂緣正に順緣と轉ず、我等帝都弘通の任に當る者其の責や重且つ大なり、此の法運開發の好機運に乘じて我等互に信念を策勵し微力合せて、以つて二陣三陣相續ぎ立正安國の大願成就に邁進せんことを念願し奉る

聯所願を述べて總裁猊下の祥事を慶讃し奉る

維時昭和三年十二月十六日

顯本宗學會 幹恩會

山口智光

祝辭

祥雲靄々和氣滿堂是レ本日恩師本多日生猊下選賞祝賀ノ光景ナリトス

抑モ猊下ハ幼沖ニシテ衆生濟度ヲ發願セラレ爾來五十餘年席暖マルナク東西ニ教ヲ布キ南北ニ化ヲ垂レ民衆其薫化ヲ蒙ムルモノ幾百萬猊下來ルノ報ヲ聞カバ其聲ニ接センコトヲ冀ヒ老若相携ヘテ法筵ニ列シ隨喜感銘顯本法華ノ妙味ニ浴ス「斯人行世間能滅衆生闇」トハ蓋シ猊下ノ謂カ昭和聖帝其薫化ノ偉大ナルニ鑑ミ給ヒ大典ヲ擧ケサセラルヽノ日天盃ヲ賜フテ之レヲ貸シ給ヒ文部當局亦聖旨ヲ戴シテ選奬セラル實ニ故アル哉茲ニ佛子相會シテ祝賀式ヲ擧ゲ俱ニ其光榮ニ浴セントス、希クハ猊下倍々自重法國一如光顯ノ爲メ鶴壽ヲ延ベ下敎衆生ノ本願ヲ達セラレンコトヲ謹而祝ス

昭和三年十二月十六日

大日本妙道會長

毛見熊太郎

祝辭

世ニ至難ノ事業多シト謂ヘドモ教化程至難ナルハナシ法ヲ萬人ニ布クト雖モ一人ノ佛子ヲ得ルコト難シ釋尊五十餘年ノ

教化モ方便説ヲ應用シテ隨自意法華ノ妙味ニ浴セシメ眞ノ佛子タラシメンノ大慈大悲ニ外ナラズ、日蓮上人ハ身讀法華經ノ諸難モ本化妙行ヲ垂レ四拾餘年ノ慈行ノ道程ハ佛祖三寶ノ教ニ歸スベキ妙訓ノミ吾人ハ幸福ニモ佛子ノ一分ヲ有スルヲ自覺セルハ一ニ僧寶ノ御恩ナリトス

恩師本多日生猊下ハ此至難ノ事業ニ處シ化ヲ全土ニ布キ終ニ五十餘年ニ垂ントス宜ナリ猊下ノ法莚隨喜ノ佛子ヲ以テ充タサレ天人當充滿ノ光景ヲ呈スルヲ昭和聖帝叡慮ノ惶キ前ニ日蓮上人ニ立正大師ノ謚號ヲ賜ヒ今亦恩師猊下ニ教化達成ヲ嘉賞セラル文部當局ノ選奬モ亦當然ノ歸結ナリトス

天恩ノ教化有動者ニ及ブ、教化事業ノ一段ノ進化ヲ及ホスベク猊下モ亦深ク鼓ニ銘感セラルヤ必セリ吾人佛子豈祝セズシテ可ナランヤ聊カ謹辭ヲ陳ネ以テ祝辭ニ更フ

昭和三年十二月十六日

大森妙道會長　西山喜太郎

祝辭

夫れ法界は實に雄大無限也しかも此の法界の内闇黑の深淵に囚えざる衆生いくばくぞや、その七轉八例の苦惱の内にもたへず光明を求むる心は消滅するものにあらず唯正師にあひ正法を聽かざれば其の苦縛を脱するや誠に難し我等大船師日生猊下の方便化導にあひ幸に三界の火宅をのがれ生死の川を渡るこれ誠に一眼の龜の浮木の孔にあへるが如し誠に師の恩厚大無邊にしてたとふるに物無し今や聖天子即位の大禮をあげさせ給ふや恩師の功績を嘉させ給ひ優渥なる恩賞を賜はると聞き我等一同欣喜雀躍を禁ずる能はず此處に蓮んで祝辭をのぶ然して今や國民上下慨ね苦界に浚在し三毒に惱亂せらる國を擧げて三惡道に轉落せんとすあゝ危いかな願くは猊下大威力を發揮遊ばされ大法鼓を打ち大法雨を降らし此の熱惱の衆生を救濟して八萬の國にも勝れたる我が國家をして覆滅の悲に陷らしむることなからしめ給へ　恐々謹言

昭和三年十二月十六日

本願正道會代表　伊東竹三郎

慶旨

建國紀元二千五百八十八年
皇統連綿金甌無缺國體ノ尊嚴ヲ宇内ニ光被スル大日本帝國聖上陛下ニ於カセラレテハ曩古ノ即位ノ大禮ヲ擧ゲサセラル

昭和清明ノ皇德ニ浴スル我等國民ハ感激措ク能ハザル所ナリ而シテ斯ノ御大禮ニ當リ國家ニ功勞アル者ヲ表彰セラル恩師大僧正本多日生猊下ニハ多年教化運動ニ奮勵シ世道人心ヲ指導シ皇基ノ振起國運隆昌社會康寧ノ爲メニ竭サレタル功績顯著ナルニ依リ天盃ヲ授與セラレ其ノ德ヲ表彰セラル何ノ榮譽カ是レニ譬ヘン願ミレバ是レ實ニ立正安國ノ法憧ヲ立テ處世ノ志願トスル我同志ノ名譽トスル所ニシテ喜悅禁ジ難ク本日祝賀ノ唐末ヲ汚シ歡喜ノ誠意ヲ披瀝シテ慶旨ヲ表ス冀クハ猊下自重自愛倍々國家社會ノ爲メ貢獻セラレンコトヲ

昭和三年十二月十六日

品川正法護持會代表　秋澤吉藏

祝辭

日蓮聖人四恩鈔ニ云ハク

天ノ三光ニ身ヲアタタメ、地ノ五穀ニ神ヲ養フコト皆是國王ノ恩也、其上今度法華經ヲ信ジ、今度生死ヲ離ルベキ國主ニ値奉レリ

一宗一派ハ猊下ノ意ニ介シ給ハザル處ト、這回曩古ノ御大典ニ際シ、聖應院日生猊下ニハ天抔下賜ノ光榮ニ浴サル、コレ日蓮門下僧侶トシテ唯一人ノ權威ナルニ於テ、生等感激措ク能ハズ、默セント欲シテ而モ能ハザル所ナリ。

夫レ『華大ナルヲ見テ池ノ深キコトヲ知ル』猊下ノ今日アル其ノ源泉ヤ宏遠ニ其累德ヤ深厚ナリ、矣、

聊カ猊下ノ功績ヲ按ズルニ、天資穎敏十歲ニシテ既ニ一部經ヲ朗々讀誦セラレ聽ク者感激セザルナク、故小林日至上人ノ如キ、其微妙ノ梵音、緣トナリ後事ヲ囑セラレタリト、

猊下曾テ嚴師日容上人ノ上京留守中ニ於テ毎月定例ノ法莚ヲ營マル、而モ幼若猊下ノ法話ハ其參詣ノ老若ヲ問ハズ悉ク感嘆隨喜セザルナク、一回ヨリ來聽者ヲ增シ遂ニ堂ニ溢ルヽニ至レリ、時ニ猊下年齡僅カニ十六歲ナリ。

『蛇ハ寸ニシテ人ヲ呑ム』猊下十八歲、堺妙滿寺ニ住職トシテ赴任セラルト雖モ修學研鑽ノタメ翌年上京、哲學館ニ刻苦精勵シ能ク蹟大細心ノ秘訣ハ一年ヲ十年ニ匹敵シ、其標軸ヲ把握サレタルナリ、知ル者其終來ヲ囑望セザルナシ。宜ナリ、宗門トシテ最至最難ナル、シカモ最肝最要ノ積弊革正ノ大業ヲ調査原案起草シ遂ニ嚴師先德ノ宿望ヲ滿足セシメタルヽニ至リタルハ實ニ廿五歲ニ達セザル教務部長時代ニ屬ス。

聞クガ如クンバ單稱日蓮宗モ廓新セザル可ラズト憂宗正義ノ血書ヲ明治三十七年春五月、陣燈孤悄ノ下ニ決死ノ一諫ヲ當局ニ建白セシ守本從軍布教師アリタルモ、シカモ何等ノ反響ナク依然トシテ今日ヲ見ル、恐ラク幾十百年ノ陋習弊惡ヲ一朝一夕ニ革正センニハ大ナル幾多ノ犧牲ヲ拂ハザル可ラズ、然リト雖モ一佛ノ子、何ゾ佛法ノ頹廢ヲ見テ哀情ノ至情ヲ起サヾル、徒ラニ教義ノ末節ニ喧騷ヲ事トスルハ未ダシモ、利己ノ榮達ヲ計ラントスル如キハ吐唾スベク、宜シク蹶起以テ祖師ニ還ラザル可ラズ。猊下ノ勇猛ハ此難業ヲ敢然トシテ遂ゲラレタルニ生等先ヅ敬慕セズンバアラズ。滾々タル急流ニ掉サス時、白浪忽チ起ル駭猊下ノ擧止ハ一部ノ反感裏リ遂ニ敵視シ宗門追放ノ悲境ニ捨テラル。

經曰、『濁劫惡世ノ中ニハ多ク諸ノ恐怖アラシ、惡鬼其身ニ入テ我ヲ罵詈毀辱セン、我等佛ヲ敬信シテ當ニ忍辱ノ鎧ヲ著ルベシ、是經ヲ說カンガ爲ノ故ニ此ノ諸ノ難事ヲ忍バン、我身命ヲ愛セズ、但無上道ヲ惜ム』又云ク『惡口シテ罵蹈シ、數々擯出セラレ塔寺ヲ遠離セン、是ノ如キ等ノ衆惡ヲモ、佛ノ告勅ヲ念フガ故ニ皆當ニ是ノ事ヲ忍ブベシ』

ト、近世、此經文ヲ色讀サレタルハ實ニ聖應院日生猊下唯一人ノ權威ニ非ラズヤ嗚呼傑ナル哉日蓮聖人云ハク『三類ノ敵人ナクバ法華經ノ行者ニ非ズ』ト、大ナル哉聖應院日生猊下ヨ、

『汝英僧タラズンバ速カニ還俗セヨ』ト激勵シ給ヘル猊下ノ悲母亦大丈夫ナル哉。

一宗一派ハ猊下ノ意ニ介シ給ハザル處大聖人ハ『日蓮ハ何レノ宗ノ元祖ニモ非ラズ、又末葉ニモ非ラズ』ト宣フ、剃髮ノ猊下ハ孤軍奮鬪一家ヲ擧ゲテ志士共ニ第二顯本宗義弘通所ヲ淺草新鼎井町ニ創設サル今ノ報恩閣是ナリ、次デ岡山、津山、神戸等陸續トシテ弘通所ノ新設ヲ見ル若シ宗門ニ復歸シ給ハズバ、今ヤ數十百ノ弘通所ヲ數フルナルベシ。然ルニ明治二十八年、各宗協會ニ於テ宗義綱要ノ編纂ニ際シ、本宗トシテ對外的重要事項ニ付私情ヲ去ツテ必然猊下ノ還籍ニ待タザル可ラズ。是ヨリ義キ日蓮宗新井日薩師ハ大聖人四箇格言『念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊』ヲ讀ンデ『佛ヲ念ズルコト間ナケレバ天魔ヲ禪ヒ、言フコト眞ナレバ國賊ヲ亡シテ國律ル』トナシ大教院ニ得々以テ協調ノ實ヲ擧ゲタリトナス、サレバ各宗亦日宗ノ組シ易キヲ

想ハシムルノ一因タルカ、然ルニ當時妙滿寺派ノ宗義綱要中ニ獨リ四箇格言ト誇法厳誡ノ二項ハ秋霜烈日ノ如ク、各宗ノ心膽ヲ寒カラシメタリ、遂ニ本願寺一類ハ無斷之ヲ削除シタルニ於テ事態漸ク大ニ、四箇格言問題ハ實ニ前後三年ニ渉リテ世論轟々、以テ永キ睡眠ノ佛教界ハ漸ク覺醒シ、明治宗教史ニ深キ印象ヲ與ヘタリ、是レ實ニ聖下唯一人ノ權威タリ、適聖下ハ本宗ヲ代表シ單身本願寺大會、各宗數十ノ敵中ニアツテ二日數時間ノ條理整然タル長廣舌ニ彼等各宗協會ハ遂ニ土崩瓦解ノ醜跡ヲ象スニ至レリ。是ニ關連セル數年ハ或ハ岡山ニ、或ハ播州ニ、或ハ帝都ニ或ハ其他各所隨時ニ眞宗、淨土眞言、天臺等、シカモ單稱日蓮宗、富士興門派ノ如キ各宗各派トノ法論續出セルモ皆大風ノ草ヲ靡スガ如ク、利劍ノ瓜ヲ割クニモ喩ヘンカ、以テ聖下ノ信仰教法ノ正系大導師ト仰グニ餘リアリ、天下無敵ハ正義ナルガ故ニ非ズシテ何ゾ、而モ此長年月死地ニ出入サレタル事、前後數回ナルヲ知ラズ、現代誰ノ人カ法華經ノ故ニ此ノ體驗ヤアル、生等此大善知識ニ師事スルヲ最大ノ悦樂トナスモノナリ。

聖下明治三十三年管長事務取扱ヨリ三十八年管長ニ就職サレ爾來九回ノ撰擧ニ於テ每回投票全部ノ獨占權ヲ以テ前後二十七年一宗ノ主權者トシテ大ニ教學ヲ督勵顯揚セラルノミナラズ顯本法華ノ宗名公稱アリ、近ク立正大師ノ賜號アリ、社會教化トシテハ其布教講演實ニ四十四年間ヲ通ジテ既ニ一萬回ヲ突破シ化導ヲ受ケタルモノ數十百萬ニ達シ、寺院教會ノ創設セラレタルモノ十數箇所、設立サレタル會トシテハ日蓮主義ノ研鑽ヲ目的トスル天晴會、婦人教化ヲ目的トスル地明會經教研究ヲ目的トスル講妙會、人心教化ヲ目的トスル統一團勞働者ノ善導ヲ目的トスル自慶會、最近ニハ思想善導ヲ目的トスル知法恩國會等アリ、而モ每月寧日ナク出テハ帝都ヲ筆頭ニ三府及名古屋神戸等ノ五大都市ヲ中心ニ、時ニハ北ハ北海道、南ハ九州、西ハ朝鮮ニ東奔西走親ク邪教ヲ委レ、入リテハ著述ニ止暇斷眠ノ精進アリ、即チ著書トシテ一端ヲ擧グレバ、法華經三部及御遺文全集ヲ組織的ニ分類シ、鑽仰者ノ考察ヲ公正ニ指道サレ純善ノ信念ニ達スベキ『聖語錄』ヲ始トシ、日蓮主義ノ如何ナルモノナルヤ集錄サレタル『日蓮主義』法華經ニ關スル各種ノ思想ヲ參照シ、正法華經、ケルン譯等ヲ對照シ法華ノ全文ヲ詳說スルノミナラズ、大聖人ノ遺文ヲ引證シ、本經ニ關スル詩歌列擧現代ノ要求ノ宗義批判等ニ及ビ其釋題、大意、文々解釋ノ各項目ヲ以テ極メテ懇切ニ解義サレタル有名ナル『法華經講義』二卷ニ次デ『大藏經要義』ヲ撰述サレタルナリ、聖下ノ大藏經閲覽ハ一日ニ譬ヘバ法華經一部二十八品ノ如キモノ三部ハ容易ナリト以テ其精進ノ一面ヲ窺フニ足ランカ、此明晰、此精力コソ前人未到ノ淨業ハ着手サレ完成サル、ナルベシ、該要義ノ序文並ニ全國數十ノ各新聞雜誌ノ批評集ニ就テ此聖事ノ眞價ハ推知サレン、

日蓮聖人曾谷抄ニ云ハク

此大法ヲ弘通セシムルノ法ニハ必ズ一代聖教ヲ安置シ、八宗ノ章疏ヲ習學スベシ

ト、世ノ青春客氣ノ末輩、未ダ一切經ヲ知ラズ此要義モ手ニセズ、爲カニ天臺學ノ一端ニ浚頭シ又御書ノ一部ト漢籍ヲ以テ聖下ノ本尊論ヲ云々セントスルモノアリ、是レ盲人摭象カ、蛇ニ怖ヂザルノ類ニ非ズヤ、恥ヅベク慎ムベシ、生等又「法華經ノ心髓」ヲ一讀セバ蓋シ得ル所多カラン、

「日蓮主義研究講話」「日蓮主義綱要」「日蓮主義初步」「修養ト日蓮主義」「日蓮主義本領」等ヲ繙讀セバ僧俗ノ共利數フベカラズ」更ニ御遺文ヲ正解スベキ金鍵トシテ「開目鈔詳解」及「聖訓要義」十卷アリ、東洋文化及我帝國ノ使命ヲ明示サレタル「國民道德ト日蓮主義」「東洋文明ノ權威」「國民教化」及「人ト教」等アリ、日蓮聖人ノ御人格ト其主張主義ヲ簡明サレタルモノニ「日蓮聖人正傳」「立正大師」及「日蓮聖人ノ感激」アリ、其他「戰士ノ伴侶」「法憧」「綜合的佛教觀」「本尊論」「最善ノ信仰」「日蓮主義ノ信仰」「佛教信仰ノ正統」等、更ニ「修法勤行ノ心得」「佛教ノ大要」「法華經要文」等々ノ如キ小冊子ハ揚ゲテ數フベカラズ、累集セバ等身ヲ越ユル幾尺、且ツ雜誌「統一」ノ如キハ明治三十年一月ヨリ今日ニ至ル三十餘年、文書教化ノ功驗甚ダ宏大ナリ「教」ハ社會教化ヲ目的トスル一般的修養雜誌ナリ此等凡ソ筆ニ口ニ聖下護法愛國ノ赤誠ハ之ヲ周知スル士尠カラズ、今　天聽ニ達セラレタル寧ロ夫レ遲キカ、擾ノ熟セザルニ倚ンカ、聞クガ如クンバ宗教家トシテ此ノ　天抔下賜ノ光榮ニ浴セルモノ十餘名ナリト、然リ而シテ聖下ノ如ク不惜身命、夢寐ニモ社會國家ノ化導ヲ忘レズ勇猛精進ノ善知識、他ニ需メテ得ベシヤ否、生等、聖恩ノ渥キニ感涙スルト共ニ愈正法ニ通曉サルレバ、サル、程國ヲ思ヒ給フ聖下ノ忠君愛國ノ至誠ヲ深ク學バズンバアル可ラズ。

聖下ノ天抔拜受ハ又生等ノ双肩ニ荷負サルベキアルモノヲ反省セザル可ラズ、

經曰、

是師ニ隨順シテ學セバ、恒沙ノ佛ヲ見タテマツルコトヲ得ン

ト、幸ナル哉、悅シイ哉、

玆ニ謹テ　聖下法動ノ片鮮ヲ開陳シ以テ恭シク祝意ヲ表スト云爾

南無妙法蓮華經

昭和三年十二月十六日

磯部滿事

祝辭

立正安國ノ祖猷ヲ奉シ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼センガ爲ニ生涯ヲ捧ケラレシ大僧正本多日生聖下ノ至誠ハ終ニ天聽ニ達シ今玆昭和三年拾一月御即位ノ大禮ヲ擧行セラルヽニ當リ特ニ積年ノ功勞ヲ嘉賞セラルヽノ思召ヲ以テ天杯ヲ下賜セラレタリ吾等久シク聖下ノ教化ニ浴スル者豈ニ欣抃踊躍ノ情ニ堪ヘンヤ

惟フニ法ノ重ンスヘキコトヲ知リテ國ノ尊キコトヲ思ハサル者ハ法ヲ弘ムルノ力ナキ者ナリ能ク法ノ重ンスヘキコトヲ知リ又國ノ尊キコトヲ思フ者ニシテ眞ニ能ク一世ヲ指導スヘキナリ王佛冥合ノ理想ハ此ノ如キ傑師ノ力ニヨリテ初メテ實現セラル、ヲ得ン吾等不敏ト雖モ今ヨリ永ク聖下ノ下ニ一致團結シテ此ノ一路ニ向ヒテ勇往邁進センコトヲ期ス

玆ニ所感ヲ陳シテ慶祝ノ辭トナス

昭和三年十二月十六日

井上道太郎

祝

蛙鳴

接物應機幾多年法憧高揚體彌圓今屋殊勝聖恩澤徒此靈山風光鮮

智厚拜草

日生上人の
天盃拜領を祝し參らせて

慶三

大君も讃へましけ里
しら蓮の
世にすくれたる
清き姿を

國のためつくす
ますらをの眞心を
めて〻たまひし
盃貴と

祝辭

南無本門常住ノ一切三寶護法列位ノ諸天善神來臨影嚮知見照覽ノ御前ニ於テ統一團總裁本多日生猊下天盃御下賜慶祝會擧行セラル湧躍歡喜措ク能ハザル所ナリ

恭シク惟ルニ聖上陛下御即位ノ大禮ヲ擧ゲサセラルヽニ當リ優渥ナル勅語ヲ賜ヒ深ク國民ノ教化ニ大御心ヲ留メサセ給ヘルハ洵ニ感激恐懼ニ不堪

蓋猊下ノ國民教化思想善導ノ聖戰ヲ統帥セラルヽコト實ニ四十有星霜ヲ閲セラル今ヤ其功勳天聽ニ達シ天盃ヲ賜ハル是レ獨リ宗門ノ榮譽タルノミナラズ誠ニ佛祖三寶ノ遺囑ヲ彌々顯揚セラレタルモノニシテ我等ハ法悦歡喜ノ感涙頰詮ヲ過シソノ言フ所ヲ知ラズ

我等ハ益々猊下ノ慈訓ヲ遵守シ行學二道ヲ精進シ先輩諸賢ノ驥尾ニ附シ異體同心ニ奉公ノ誠ヲ盡シ猊下ノ偉業ニ微力ヲ勵マシ以テ聖旨ニ副ヒ奉ラントス一言以テ祝辭トナス

昭和三年十二月十六日

千葉縣市川町
立正會館主
小澤元重

○京都妙滿寺ニ於ケル祝賀會

天杯拜受祝賀會は、十二月五日午后九時より妙滿寺大廣間に於て、總本山妙滿寺、京都統一團、國光婦人會、聯合にて擧行せられ滿堂立錐の餘地なき盛況を呈しました先づ原田日勇師の挨拶に次で、檀越西村吉右門氏、細野辰雄閣下、妹尾朔氏、榎本正氏、梅室榮太郎氏京都府社會教育主事小倉恒司氏、文學士河合陟明氏、等の祝辭あり次に本多猊下の所感談聽者の肺腑に徹す、一同歡談時の過ぐるを知らず、十一時陸軍中將天野邦太郎閣下發聲の下に

天皇陛下　皇后陛下萬歲　本多日生猊下萬歲を三唱して散會す、二三の祝辭左の如し。

祝辭

今回本多猊下ノ御榮譽ヲ荷ハレマシタ就キマシテ一言御祝辭ヲ申シ上ゲマス猊下ガ多年教界ノ獅子王トシテ法ノ爲道ノ爲國家社會ノ爲獅子吼セラレマシタ偉觀ハ世間周知ノ事デアリマシテ、世人ハ之ヲ目スルニ今日蓮ヲ以テシテ居リマシタ、コレハ吾々顯本法華宗ノ門徒タリ、將又猊下ノ末弟子タルヲ光榮トスルモノヽ陰ニ以テ肩身廣ク心强テヲ感ジツヽアツタノデアリマスガ其ノ社會教化、國民思想善導上ノ勅果蓋シ甚大ナルモノアルハ誰モ疑ヲ入レザル所デアリマスガ特ニ東塲元帥上村大將佐藤、小笠原其他陸海ノ諸將軍ニシテ猊下ノ道友タル人達ハ數多イノデアリマスガ、之等將軍中ニハ畏クモ陛下潛邸ノ砌學問所御用掛トシテ多年奉仕セラレマシタ次第デアリマシテ其猊下ノ鼓吹セラレマシタル信念精神氣魄ハ必ズヤ是等ノ方々ヲ通ジ恐多キ極ナガラ直接ニ或ハ間接ニ上御一人ニマデ影響ヲ及ボシ奉ツタデアリマセウコトハ信ジテ疑ハンノデアリマス今回ノ御榮譽ハ蓋シ御尤ノ次第ト拜察スルノデアリマスコレハ獨リニ猊下ノ御榮譽タル計リデナク宗門ノ名譽デアリマシテ定メシ祖師御聖人モ冥々ノ裡ニ吾意ヲ得タリト微笑默頭セラレ給フタコトト確信スルノデアリマス

今ヤ聖上陛下御即位ノ大典ヲ擧ゲサセラレ聖勅ヲ下シテ內ハ則チ教化ヲ醇厚ニシ愈民心ノ和會ヲ致シ益々國運ノ隆昌ヲ進メン事ヲ念ヒ外ハ則チ國交ヲ親善ニシ永ク世界ノ平和ヲ保チ普ク人類ノ福祉ヲ益サムコトヲ冀フト仰セラレテアリマス

此ノ昭和維新ノ時運ニ際會シ益々宗風ヲ擧ゲ一天四海皆歸妙法王道國家ノ理想ヲ實現シ中外ニ輝カスハ大御代ニ生ヲ亨ケタル私共ノ當然ノ責務デアリマスコノ重要ナル時機ニ當リマシテ猊下ニハ折角御加餐下サイマシテ益々御健康デ斯ノ道ノ爲社會指導ニ御盡力下サランコトヲ祈ル次第デ御座イマス

京都府社會教育主事
小倉恒司

贈本多日生先生天杯拜受紀念祝賀辭

河合陟明

今日是のお目出度き祝賀の會に於きまして一言お喜びの言葉を列ね私達の謝恩誓願の心を申述べたいと思ふのでございます。

先生は幼にして夙に佛門に入られ天資英邁聰敏を以てして而も之に加ふるに日夜黽勉孜々として止暇斷眠の修養工夫を凝らし行學練磨を積むで遂に今日の大器を晩成せられ、命世の導師として一世の先覺として新道の發揮妙教の宣弘に一意專心力を竭し、是を以て或は衆生の濟度を行願し民心の陶冶を實踐し或は祖國の經綸を論じ社稷の安泰を圖り、文章述作に言論講說に東奔西走拮据經營玆に二十又餘年、其の御精勵活動の動し彌高く、我等も實に先生の教化に依りて是の我が世尊の信仰妙道の領解に入るを得、邦家社會も漸く先生の教導薫化に浴するに至り、其の功德遂に畏くも天聽に達して至尊の御喜納賞美し給ふ所となり今日の譽れを荷はるゝに至りました事は私達洵に欽慕景仰偕に俱に慶賀に堪へざる次第でございます。

玆に顧て少しく先生の御功勳を省ますのに、先づ文章著述の方に於きましては天成の聖者孩童の頃よりして刻苦勉勵叡哲溶智相頼り相資けて雄渾の識明快の斷早く既に其の業績成果は、第一に、佛陀世尊の本懷佛教全藏の中心魂魄文明統一大成の眼目指針たり眞趣歸たる妙法蓮華經全文に對して實に周匠透徹該博深遠なる妙解を講じ圓義を釋して其の淵旨を闡明し佛意を顯揚し我等をして、眞に本佛信仰法華經修行の眞意義究意絕對の得益の顧音吾人衆生と法王世尊の正體實相の何物たるかを教へ示し歡び入らしめ下され我等は誠に應身慈悲の常住三輪の妙化の功德恩寵に歡喜光偈身して金剛磐の是の世尊大信仰の生に我と我自らを安住せしめ得たのでございます、嗚呼我等此の一大法界に於ける絕對宗教の殿堂に入るを得たる是偏へに世尊のみ惠みの內に於ての恩師先生のご恩功德の第一に指を屈すべき所のものであります。我正師の此の功德を生みなせる法華經講義原典に擬へて全八卷錦繡珠玉筆力扛鼎語の加ふ可きなく一句の削る可きなく圓滿豐富充盈完結善盡し美盡せるものその化益の廣潤深厚なる豈何すれぞ敢て賞讃に過ぎた

りと申しませうぞ。次で更に廣く、三部十卷の法華經と日蓮聖人の御遺文全体とよりして其の金口妙文本化の義判を拔粹類纂して醇味精美なる聖語錄を編み、我等が抑々此の人生に於いて爰にも肉にも現實世界幾多の不滿要求希望憧憬煩惱穢土因理想渴仰等の種々なる動機より發心して佛教信仰の正路に入りてより、生命の無常と永遠、靈界に於ける因果一實の理法、宇宙法界の實相佛陀常住の處行を信解體達して智目行足妙道の修行道義の實踐に他を批判し自ら警策しつゝ現當二世眞假の兩益を全うするに至る眞乎人生に於ける宗教信仰の始終と道程とを秩然條然たる一大組織の体系に統一して我等の信仰生活に規範あらしめ下さいましたると同時に、廣く世の一切の人をしてやがては遂に眞實の宗教即ち佛教に進趣して不動不易の安心立命を得宇宙絕對の尊嚴慈愛の大格實在者の御前に悅び頂く所以のもの、換言すれば眞の「人生の王道」を唱道せられ、而て此處よりして更に大いに進んで竟に嗚呼驚歎す可き哉大藏一切經を精讀讀破せられ其の威業の果は吾人の前に活潑なる大藏經要義として現れ卷を數ふる事十有餘、未だ尙業訖れるに非るも、然も既成のもののみにても其の量に於て大なるのみならず又其の質に於てもその名の示す如く大藏五千七千餘卷八萬四千の法門の精要の義趣を撰述し併も是等の全体は恩師沙門の烱眼朗然たる一節動かす可からざる天眞獨絕唯自明了の統一原理に依て包攝融歸せしめられ、其の撰述する所の經旨釋文教義理趣等佛教そのもの〻種々なる方面に亘りて、舊來の傳承的謬見淺識を拂拭し前賢未發のもの窟に尋からず、全佛教に於て其の醇乎たる宗教的妙旨幽遠なる哲學的眞理圓滿なる道德的教訓微妙なる藝術的甘味悉束ねて淺るゝなく餘すなく光彩粲然是實に命世の教傑非凡の天才に非るよりは到底成し難き所、若し功を頓て辨ずれば則ち先生の堅固なる發願志念と清淨なる內外同志の佐助とに賴り加ふるに佛天三寶の冥祐加被せられて成れる者でございまして、宛かも先生の御後の自らお書きなさいました輔物にあります所の「誠信如清水珠念善如糸貫華一心如鏃穿石」てふ鄭先經の文の如く讃嘆措く能はざるものでございます、然も是等は偏へに佛教の妙旨を世人に領解せしめ日蓮主義の大主張を明かにし法國の恩に報じて佛子の萬一を竭さむとせられたるもの、されば斯の業成りて玆に佛教の研鑽攻究は一新天地を開拓し普く衆庶は後來やがて必ずや佛陀の統化に拜跪するに至るを疑ひませぬ、即ち此の大藏經要義に於ては、如上の大主張よりして、法華經如來壽量品の幽旨を洞察し佛智の渾底を叩發したる眼光よりして所謂小權實乘等佛教總体を綜合し之を一大統一的達觀の下に理路整然脈絡一貫進趣通入本末究竟せしめられ廣大玄微の法門教行人理果皆統攝歸せられて各々その佛知見的一體系の處に安らひ玆に一代聖教は厥の調整の理想を全うして曠然たる佛法の眞趣確立し、更に加之恩師の常に道破せられます如くに、這般の見地及び豐饒なる內容よりして廣く世の諸々東西古今の思想文明を開顯包容し是と鷲王の名教とを融合調和して人文大成の遠き將來を論斷豫言せられましたるもの、於戲生等此に於てか一個湧然たる感慨無量のもの無能を得るでありませうか、法運の興隆玆に再び端を新たにし來れる歟、而て先づ之を朝廷に獻じて王佛冥合の一助に資せられ、我等も窟に斯の述作斯の啓導に依りて漸く大藏聖教の各部門に亘り又綜統的全体に關して接通歸一の美趣を了し佛陀の知見の一分に進み趣かむとするに至れる者でございます。嗚呼是れ人生の意義に迷

閲して法王の遺教を鑽仰し、文明の理想を通觀して吾人生存の眞諦を悟了し據て以て向上活動自他兼濟の美を成さむとする者に採て眞に天來の恩惠なる哉。而て此の一切經に通曉なさいましたる一大達觀の結果は軈ち一代佛教綜合の統一四判釋となり、精讀契會の深到克く佛意を涛み得て、吾人が現實より理想に向上して之を究極する所以の正道を開き、佛教の正系と傍系とを分ちて阿含法花涅槃を以て前教に束彌寶積般若華嚴を以て後者に屬せしめ、此は人生法界の眞相理想的實在界の種々なる象面を想望し觀念せしめて外延にも內包にも大乘深遠の處を照了せしめ、彼は此の理想を完成して即ち乃ち經王法華王者の皇々たり穆々たり堂々たり厥の此に到るの大道を示して世諦と小乘の四諦と第一義諦とを疏通し以て嚴密に統一の歸趣を示せるものなるを道破し、世の衆生をして現實の人生を通觀し生存の本源に溯つて其の起因を識得し進んで理想の鄉を尋ねて實在の境界を大觀し善德を積むでこの理想境に達する實踐の方法と實行の活力救濟の動力とを吾人の心眼の前に啓示し靈性の裡に賦與なさいました事でございます、嗚呼此の一代聖教綜統の無邊聖諦に於て誰か亦惑ふ者がありませうか、是義にかの聖語錄に於て示されましたる人生に於ける宗教信仰の正統を更に大いに衍釋し擴大し論證し提說して之を佛教綜体否寧ろ私の等ひまするのに其の大綱歸趣に於ては人類の西東古今の精神文化の上に度つて示教利喜せられ、其の內容に於て宗教道德哲學藝術或は政治經濟法律刑罰又は軍事交戰等にも亘り精神文明物質文明の兩者に關し、其の範圍に於ては個人家庭社會國家世界宇宙に至り人類及び他の衆生一切萬法に及ぶ法界の實相に迄洽き所の釋尊の名教を萬人等しく仰がしめむと醇要簡潔に光顯せられましたるもの、嗚呼潛かに思ふに此の綜合的佛教觀はその始中終を通じて月氏震旦日域三土に亘る論師人師高僧碩德智者學匠中未だ曾て有らざりし所のものであつて、彼の漢土の天臺智者大師の五時八教等の判釋に百尺竿頭大一歩を進めたる而已ならず其の構想に於て壇梅に於て亦固より獨自特異のもの有り、一代の大綱法門の骨髓たる記小久成の旨致よりして五部教判の包攝の內容も先生自得の發明工夫に成り併も最佛意に契當し、一大藏經の教理行果を收羅結束して獨創の解明あり人法殊に女性觀の如きに至りては世尊の垂則示教の眞意を會得して佛子の女性大丈夫なるの奧旨を光宣し堂々たる佛教の女性觀を確立して舊套の謬想癖見學者深痼の疾に陷れるを拔擢揚扶し魔の窟見たるを克服せしめて完膚なき迄に之を粉碎し婦人の眞價を顯揚して女性の爲に萬丈の氣を吐き後來必ずや世界の女性は佛陀世尊のみ前に合掌瞻仰するに至るの日あるべきを豫言し斯くて男女人類文明の大依止處を光被して世間をして安住せしめむ事を天下に卒先して爲されたるのでございます。先生自ら曰く、佛教の眞面目宗教の本質に關し如上の五法其の壇梅其の意趣義分分明自ら省て釋然として會心の笑みを洩らすと。佛教の判釋此に於てか極まる、固より之は、佛陀久遠の高弟本化大菩薩日蓮大士出でられて、壽量顯本の絕對的統一判を唱道し是れ佛智の發動なる哉眞乎我家に於ける法性の渾底玄宗の極地を詮明して悠久久遠の我が本佛の宗教を千古不滅萬代不磨なる金剛の地磐の上に建設したる確然不動復奪ふ可からず易ふ可からず嗚呼法界の大美を濟したる本化大士開顯の教觀を經たるに據るのでは有りまするが、然もその後に於て宗祖の法燈を最純粹に傳へられましたる大士滅後第一の人と謂ふべき我が恩師沙門日生先生が

そのかみ宗祖並びに諸々の先賢に養はれ培はれられし本化開顕の智眼を以て全藏の閲讀撰述てふ大業を企て其の慧眼の運用能く經旨佛意に契うて玆に斯くの如かる佛陀統化の正統信仰の教となり古今を貫しうする明斷卓見人文の指導として我等の前に現るゝに至つたのでありまするか、然り而て亦復天下後昆の人士をして永く感奮興起せしむるでありませう。嗚呼我等功を世尊に歸し奉り本化日蓮大士に捧げ次いで我が日生先生に向け參らす可きものでありませう。而て此の議見は進んで日蓮聖人の御妙判に及び、先づ恩師畢世の主張たる日蓮聖人第一の遺書開目鈔の詳解となつて表はれ、大士の心血を滴々直瀉して層々切々その眞意義を條然として開發宣揚し、大士以後法燈明滅六百年種々なる曖義異解を悉く掃滅して遺餘有ることなく、明快徹透の論斷深岡幽玄の證理は後世をして再び斯教に迷ふことなく過つことなからしめて先生自ら期せらるゝが如くに本化別頭の教觀に層一層寄與し裨補し光彩あらしめ活力あらしめられましたるはあゝ即ち是でありまする乎、謂ふ所の獅子乳を瑠璃瓶に盛つて之を傳へ還之を即我等後學の佛子におわけ下さる然りおわけ下さつたのでございます。如上の述作先生の文筆の主なるものにして尙斯の如く、殊に藏經撰述の如きは着手の始に當つて茫洋の嘆なきに非すと述懷せられましたるもの、然も今や始ど成り佛祖の道統を光揚して衆をして其の慈醇を味はしむ、我等否實に師に於てこそ抃讃自ら禁ぜざるもの有るでありませう、あゝ偉なる哉私達は洵に此の撰述の殘餘の分も皆完成して慧眼を益々開かしめられむ事を嗜養つて止まざるものでございます。

愛に先生の言論講說の御跡を省ますのに、其の烈々炎々又柔和溫順の御說法直ちに我等の肺腑を貫いて心眼を開かしめ耳朶を勞いて骨髓に銘せしめ或は又質直の心に靄然として和がしめ、私達が此の聞法の聯緣に列つて妙道の利益に參り浮沈向脊の圓理を悟つて名實俱に眞佛子として佛世尊と永久の契を結び靈光普照圓慈歡喜の裡に菩提の覺悟を現の日日にして送る樣になりましたのはみ佛さまのみ惠みは申す迄もございませんが又洵に先生の教化薫陶の賜でございます。先生の教を說かれまするや或は高邁の卓見を幸いて平易の言に寄せ或は世俗の事緣より瀾つて深幽の理に及び博大の想玄秘の智熱誠の情剛健の氣まことに痛烈淋漓又遲然和樂何人も先生の教に接しては感激し法悅を覺えない者はないでありませう、一度び法敵を擊破し邪說を膺懲するに當つては是れ紛々たる武夫桓々たる法將烈々團々たる折伏力打擊力を以て之を粉碎剿滅し復餘り有ることなきと共に他面に於ては而も殊にかの綏喜の慈手統括の慈智を以て老若男女賢愚貴賤等しく薫化せらるゝに至るその溫かなるご人格に至りましては洵に比ひ多からざる所、出家の身に在られ乍らよく世間の裏面に通じ眞諦第一義を究めつゝ深く俗界の事情に達して治き實相の知見發動しては實に私達の心中の賊を破り又街頭の敵を伏し而も誘拔懇ろに自ら成蹊の美を成すに至るのでございます、然るが故に嘗に先生と時を同じうしたる君子賢女のみならず後世の人士にして亦其の德に墓ひ入る者多かるべき事でありませう。而て先生の御講演說法の成果は直接聞法の人々を益する而已ならず其のお言葉は又直ちに速記淨寫せられて書冊となり廣く江湖の士に頒ちて同好同慶に入らしむるもの、先づ遠き始め、法華經講義聖語錄等成りて若き先生の意氣軒昂たりし頃法華經大觀の講あり、經文祖判の對照研究の產たる聖語錄中佛陀の相好智德休用應現の深講であり義學の淵旨教觀の精美我等學徒の垂涎措く能はざりしの、啓悟の効甚大なるものあり、爾來講說年を追うて頻に加り或は日蓮主義となり又その綱要となり運用となり戰士の伴侶となり又は日蓮主義と修養教化國民道德とを結び或は日蓮聖人の正傳となり感激となり最善の信仰となり、謹號下賜に因んで立正大師となり、或は聖德傳教日蓮等古賢の眼識を學んで神儒佛三道貫串の一大旨趣を道ひその思想の共通致一從淺至深を論じて之を体系的に發揮し獲て以て東洋文明の權威を斷じ法愼を明かにして我邦文運の過去及び現在將來に於ける正統体系とその進歩發展とを回顧し又豫言し或は菩薩行を教へて六波羅蜜に入らしめ信仰修養思想の三面を融和せしめて日蓮主義者の本領を自覺せしめ、或は如來壽量品を統釋して法華經の心髓を明し又一經の要文を講ずる事再參延びて彌々出でゝはかの大藏經要義の講席となり或は中心的御妙判の法延となつては聖訓要義を生み摘要を產み、夫の佛陀垂教の精說たる大藏經要義と相並んで此は本化遺訓の醇味を嘗め、此等經典遺文の釋義に於ても祖傳育訓の論述に於ても種々なる着眼よりして概ね未だ先師の啓かざりし所のものを啓き明さゞりし所のものを明し、或に又實に本尊論となりて宗教學上周備具足せる吾人信仰の對境たる本尊の相貌を顯說なし下され、其他實に枚擧に暇あらざる次第であります。斯くして先生の御經論活動内には文章に言語に玄妙幽邃の教學を講じて英邁の傑湖海の士を養成し豪懷卓落の雄國士幹臺の材をして將に大いに天下に爲すあらしめむとし、嗚呼それは是れ張膽刮目期して待つべきもの乎、外には早く既に天下に率先して精神教化の忽緒に附す可からざるを唱へ、先づ機關紙「統一」及び近く「教一」を出して宗學の宣布民心の和會に力め同時に經世家教育家軍人學者或は實業家宗教家等社會の有ゆる方面に於ける識者を指導し、自ら一世の木鐸と爲つては廣く世人を警醒警破して一大教化運動を起し、或は天晴會地明會となり又講妙會自慶會となり講演說法遊行の足跡天下に洽く法座既に業に古賢に從つて一萬を超ゆる に至り、或は政府の乞を容れて遠く明治聖世の末つ方大遊事件の勃發してより其の禍根を剔絕せむ爲め苦心を重ね膽を練つて敵地に突入し賭命の豪氣彼をして寒からしめ具さにその内情を探つて救濟の策を講じ、而て此等の教化事業今尙續き近くは現時の思想國難に對して昭和維新の聲高き今、かの明治回天の壯擧に際しては嗚呼思へ衰殘悲運の極み軟風戰ふ所謠眼長夜にして硬骨氣節の士敢て之無きには非りしも然も我が日蓮門下本化の學徒の殆ど何の爲す所有らざりしに鑑み恩師一片耿々の經世濟民身經法重の念止み難く死身弘法の志凝つては知法思國會となりて國難救護の第一矢を放ち昭和以後光輝ある我徒の活動の劈頭に萬丈の氣を吐き將來垂んとする我等の雄飛の第一先鋒として立つて同志の儀表と爲られし、我等も此にされば其の一分に加つて恩師の業を佐けむとする者、而て又逸す可からざるは即先生の使命の切要なるもの有之輒ち師夙に壯年の頃より宗門の廓清法運の昌隆を念じて教義學說訓練經營内容にも形式にも弊風を改革し雜亂を禁斷し自ら實踐して今日に至られ高風清節德孤たらず効績漸く顯著にして嘗に我宗の内のみならず今や實に教壇想界の權威として一世に呼號せらるゝに至り、殊に佛教の所謂諸宗派の僧俗も近年頻に覺醒の機運に向ひ内心我正宗に入れる者多々否む可からざるものあるや明けく、久しく顧られざりし東洋精神文明の寶庫も再び開かれその中に於て時運と共に所

謂諸宗派諸教說は任運に成敗陶汰せられ開會疏通して大王の經典教學に朝宗して燦然たる一大統一を形成するてふ將來的大潛勢力を胚胎せしめられ、斯くて幾多の個人及び社會は法華經的感化影響を蒙るに至り遂に其の功德紫雲の上に聞え、生蓮んで愷ふに畏くも至尊の御身に先生の德化は及び朝廷今や祖宗の皇猷と國體の眞義、諸々偉聖の經綸と邦家文運の安住歸趣とを再び新に悄り給ふの端緒萌し就中佛教の眞價功蹟にも漸く眼を注がせらるゝ曙光ほのかに、かくて曩古御即位の大典の佳年を以て恩師先生に天爵を恩賜せらるゝに至りましたる美事に接せられたのでございます。嗚呼今回の慶事意義は深く少しく歷史を顧みますのに、我國に於て法王のみ教の傳來するや先づ聖德太子出で給ひ百世の達人として朝廷及び廣く民家の道本を定め我日東文明の調和を圖りて輪王の佛典を明かにし給ふの喜運に會ひ爾來王室は佛法興隆の大檀越たり、その盛時には御歸依篤うして斯教に盡瘁したる偉傑は朝廷より表彰せられたる事鈔からず、隆替無きにあらざりしも斯の大謨は明治維新の際に至る迄繼續したりしに、溯て德川の時世不學の舊者淺見の神道家或は國學者流等、我國文化の本質を謬り內容も範圍も狹小淺薄にし文運の進展本末の序を戾らしめて佛法を疎んずるの偏見陋習を讓し、其の責遂に明治一新の際悲しむ可きは當年の白面書生兒王政を復古せしめ得たるも然も其の靈的生命たり國体の中心魂能たる鳥瞰の明教を茂ろにし寧ろ痛む可く又笑ふ可き排佛毀釋の暴舉愚態を敢てし精神界に於ける百般の施設概ねその宜きに中らずあゝ悲慘事積弊堆く凝ては遂に今日の思想學見の濁亂沼々として物質的皮相淺薄の偏傾的文化に墮し一部の黃吻兒や笑ふ可き故敢て宿士の卓識に趨き聞くことをなさず浸潤之譖膚受之愬を行て國體を危きに傾けむとし剩へ淺膚の學之を煽し邪曲の教之を毒して勢の極まる所果を皇室に加へ奉らむとするに至る。あゝ止んぬる哉、尊々先憂後樂の士砥節赴義の人維れ如何の感奈何の爲す所かある信問文章經綸士年來竟畢讀何書　然り而て併も此の時に當り他面教界の眞只中に椰風休雨念餘年大いに精神界に叱咤して時弊を糺彈し非法を折伏し門下幾多の俶儻健剛の士を輩出せしめ齊々たる國士組國を荷つて立つに至らしめられましたるものあゝ維れ先生の業ならざらむや、薫化の德風皇室に接び玆に今上御即位の勅柄乎として天業を經綸し教化を盛にして以て克く國家の大本を立つべき旨を宣らせ給ふに至るあゝ銘記す可き哉是の詔愼慎す可き哉是の勅、擧國民人の覺醒方に此の處より發する乎

夫れ始め日蓮大士の承久亂後に應生して、柳營の地鎌倉街頭に法鼓を鳴らし教化を布き尊王を唱へ大義を叫ばるゝや擧宗震駭せしも闇者應ぜず國國騷擾せしも鎌府容れず却て未曾有の迫害を加へて王佛一乘の雄圖暢ぶるに由なく爾來道統六百年政權武門に在りしかば祖師の遺業も空しく實ならず數多殉教の烈士相次いで流血の壯擧事を列ね只管顯正勤王の大義に竭して慘風悲霜のいくその星を經たりしが時なる哉天なる哉明治戊辰王政乃ち復古し漸く我宗援ふ可きの形を爲すに至つたのであります然も當時未だ時運遠かに來らず世途難く一時釋教殆ど地に塗るゝに至りたりしも、道の間に在つて恩師は立つて祖道復古の聲鐘を亂打し風雨多年明治の末大正の初佛祖の教光大いに加り來り先帝の御宇今上攝政の時日蓮大士現滅の辰莫爽宸階に生じて立正大士の諡號は師祖に下賜せられ門下統合の一機運を進むるに至りましたる是又先生の提唱奏請に由る所であります、而も尙進んで今年昭和戊辰かの明治維新王政復古より周甲の時、今上皇極の大禮に中り聖天子御親ら道本を立て國礎を靠むる一に教化を盛にするに在るを敎へ給ひ先づ功を虔つて恩師先生に天爵を授け給ふ、義に人の功を賞したる者今還つて我身に及ぶ、於戲先生悠々たる遠謀勃々たる意圖今成績甚光あり、固より素懷の一分に過きざるもの古聖の遺猷尙遙かなりと雖も然もあゝ「弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ何ぞ佛法の衰微を見て心情の哀惰を起さゞらんや」實に我れ何ぞ涙無きを得む佛子の至誠豈空しからむやは凝つては通神天地を感格し佛陀攝化の容れ給ふ所となる乎、我等玆に翻て微古鑑今推今辨古眼を歷史の表にして曠遠く其の行方を圖る時維れ佛護漸く我が輪王の國に實現せむとするの吉兆なる歟、見よ法華經如來神力品樂土品等普勸發品等本門に於ける現實的豫言竺漢扶桑諸先覺の豫言本化の宣布遠識の豫言王佛冥合戒壇建立圓浮廣布十方通同あゝ遠ければ流長し矣一華を見て春を推せよ一滴を嘗めて大海を知れ　遙かに見る蓮山の第一峰現實と理想歷史と超歷史との契結將來遠き豫言と其の歷史的實現深密穆々於乎神秘なる宗教の王國　默示錄的深みへ歷史の平面より

されば是より洋の東西時の古今其の精神及物質文明の諸流は渾圓球上世界の縮なる我國に鎭り各々其旨趣を明かにして蘭菊美を競ふ中自ら進化の理法は行れ時々の賢哲の教導と相俟つて劣を斥け優を推し小を捨てゝ大を取り淺きを去つて深きに就き邪を脫して正に歸し斯くて文明の趨勢は任運に佛陀の攝理と相結んで此の地に行はれ醍醐一實天晴地明日東照西四海歸珍法憧高く驤つて六合ひとしく法王の化益に潤はむ焉

吾黨嶺の名教その旨しるく妙經の金口東漸しては傳ふる所の更に先哲の識を生み本朝に入りては聖德傳教日蓮等千古の達人の豫斷する所となりて、世界史上今や日東曙光ほのかなる頃とはなんぬ　於乎我等玆に乃ち應に聖應生師を加ふる事を爲さむ　我徒の興起豈徒頑ならんや焉矣

嗚呼恩師先生の御人格たるや俶哲英邁智見德操兩つながら存し經綸活動甚だ大いに學殖造詣深幽測達謂ふ所の學達青天精妙入神なるものなるか、一面には眞理教法の豊富錯綜を體系的に組織統一する哲人的學者的頭惱を有せらるゝと同時に他面には宗教的神秘の理法の歷史の裏に流るゝを洞觀して人文の傳承發展を遠想する豫言者的歷史家的眼光達識とを併せ有して、一人格よく歷史を呑吐し社稷を呑吐し人文を彫琢して雄大の識豪懷の氣嚴乎たる節持溫乎たる包容、偉大なる靈的抱負に充ちて悠揚迫らず勤誠並びに圓滿にして好く子弟を同化誘掖せらるゝ人の師主たると共に又一面奇智縱橫戰略將軍の恢あり、思慮周密にして深想卓見則ち憂國護法の士經營統率の材宗教家たり經世家たり慈愛の情操崇高の信念　嘗に精神の德に於て然るのみならずおからだの方に於きましても殊に私達の感じますのは其の御容貌お姿に菩薩慈愛の面影を宛かもさながらに具へて居らるゝ事でありまして精神の品感情操自ら容姿に表はるゝといふもの　人間の身體は所謂天地の造化に於いて最好き藝術品であり加之又之を我に依て創作する事ができるのでありますか、藝術家の全生命が一刀一筆の中にあるが如く我々の全生命が一心一念の中に宿るが如く、一々の限定其物の中に全實在がなければならぬ、即ち肉其物の中に靈がなければならぬ、相性果報本末究竟して一心一念其物が直に人格的意志として具体的實在でなければならぬ、眞に直接なる人格的体驗に於ては、有限が直に無限である現實が直に本

體である、肉は靈を求め靈は肉を、求むるのである、私達は或は思索瞑想に耽らるゝ面影を先生に見或は天上の顧音を地上に傳ふる說法者の風格をおもふ、識者も凡俗も敎を受くる者はひとしく薰化せらるゝに至り、眞に先生に於ては私達は菩薩一切世間の境界に至つて衆生を化するてふ趣を先生に於て偲ぶのでありまして、色心二法に亘り殆ど間然する所無き計りなる、實に人間として芽出度く勝れたる功德の果報を積み受けられましたる事でありませうか　吁欽仰景慕すべきなる哉先生の御人格、感嘆讃美之を久しうして止ます、知る、先生の眞面目は外には使命を自覺して勇健の想憐愍の心法華經の行者たるの活動をせらるゝと同時に上求菩提下化衆生內に省て感謝報恩の日々を送らるゝ至誠の佛子本佛に仕ふるの聖者なるか　而て私達が最感謝感激に堪へませぬ事は、我等が過去久遠遠々劫よりこのかた無明の闇に迷ひ六道生死の巷に流轉輪廻したりしを宿緣熟したりけるかみ佛さまのみ惠みの下に恩師先生の薰化敎導に依りまして我が元品の無明を破擊して元品の法性を開かしめられ我が佛性に我が本佛信仰の電流は通じ火花は飛びこの一念信受因位の極際に法王授職の佛位を成辨し現當二世眞假の兩益を獲得するに至らしめて下さいましたる事でございます。あゝ師弟の契淺からず　思へば長かりし過去を顧み近き將來の涯無さを浮べ、遷滅無常は昨日の夢菩提の覺悟は今日の現なる永遠の生命に想到して恒久渝らぬ我受くべきことなき果報微妙の快樂自受法樂衆生濟度智願攝化の常住をこそ思念憧憬してはまこと無限の感慨萬古悠遠の情懷に打たるゝのでございます。されば我等も世尊のみ前に佛子として神力感應御加被を祈り大慈悲念に感孚して眞の佛子の本分を竭し故逸懈怠を我と我が警めて歡喜法悅菩薩の行願に活動し一分にても衆生濟度の誓願を行じて日頃の覺悟を實にし悉く此の功德を壹回向佛道して臨終を期して靈山に往詣し世尊に見え奉て成佛の大利益を成就せむことを至心に誓ひ冀ふ次第でございます。あゝ私達は洵に宿殖の妙因に非るよりはいとゞも難きを値遇しまつれる佛陀のみ敎、人類一切の想念及び作業の、無窮なる方涯無限なる歷史に超脫して古なく新なく該ねざる無く蓋はざるなき唯一絕對の妙道至法、其の眞面目其の眞態を人界の範圍人力の能ふ限り、仰いで佛化に賴りつゝ髣髴として此世に於ては之を實現せむと覺悟誓願致すのでございます。先躁巍々乎として日蓮大士あり、古往今來の聖賢あり否又近くはわが師あり嗚呼我等は日蓮聖人滅後の第一人者たる日生先生に世を同じうして敎化を受け是の二人とはなき正法の師に私淑して滋味を享嘗し佛陀の慈光に浴して發願志念し先覺の故智に徵ひ恩師の芳躅を繼いで力を法國の爲に竭さむとする者、併も時運は今や日蓮大士往年の情勢と宛も酷似し內外憂患國步艱難思想文物紛々擾々濁世の五亂阿鼻の七夢兇徵具さに現ず起たざるを得ざる也戰はざるを得ざる也然り而て深察一顧如上の凶兆はさもあらばあれ正法興隆の吉瑞なる歟、雨の猛きを見て蓮の大なるを知り花の盛りなるを見て池の深きを知る以進惟遠以往知現如是相の至本末究竟等也　今や渾圓球上一家を爲して大士の時代より一歩を進み、四海比鄰の內にありて各國互に勢力文物を競ひつゝあるの時、專政鎭國の夢を破りし我國はかの元に仕へしマルコ、ポーロによりて大士の當時始あて世界に知られたるなりし鎌倉時代豫言者日蓮の時代に直接して方に名實共に世界史上の舞臺に立ち、往古以來參千年吐嚼吸收包容同化して今日に至れる東亞並びに泰西の文化は就中我邦天職の靈源たる王佛冥合の形相醍醐一實の本質は是ぞ寔に日東獨創なる色心融節の統一的文明にして世界の縮寫結晶たる我國よりして過去東漸收攝の時代長かりしに對し今發揚西漸の時代は生み出されつ、思想貿易の歷史に於て原料輸入の長時漸く終り我精製佳品の雄飛すべき時至らむとする歟、於戲人文の行方を洞觀して本化の敎觀は既に業に法愼早く立てられたりしが然も大士の時代は未だ世界的宣揚の機に非りき、今明治大正昭和の時よりして我が獨創開顯の皇國文明は其の世界史的意義と使命と權威とを確認して漸く太洋の彼方に光投ぜんとはするに至れるか、剩へ國家的一大自覺の機運は萌し、敎化尊重の詔勅天子より出で大士並びに古來先賢の鬱懷漸く暢びむとするのでありませうか　あゝ感慨我等轟深からざらむや　蓋し是れの宜しきに順ひて法師出現し機を鑑み國を鑑みて衆生を化し以て之に依らしむるもの、於戲風雲英雄を興すか英雄風雲を興すか　惟ふに是因緣感應の法門に屬し玄く佛陀の攝化と聖偉の自覺と互に相賴るものなるべし。されば我等も亦爲に一段と勇を鼓し此の風雲を恩師一代の間に終らしめず克く師資の法燈を我れ神聰血持し色讀體達し風雲に乘じ風雲を興し時勢を鑑み機國を察して經綸活動曾無他事三軍を叱咤して法王進軍の曲を吹奏せねばなりませぬ者　我等は學び我等は知る恩師の靈訓宏量の氣宇濶大の學風崇高純淑の智德節操雄渾卓牢の識見使命亮直義を守つて而も偉大慈愛の襟度悠然たる蓋世の氣慨超然たる鑒的抱負、恩師の人格に於て開法は結緣の正路たるを證し恩師の功績に於て文章は經國の大業たるを悟る、先生が日蓮聖人及その後傳燈の先師によれる本化の敎觀乃至は三國に經たる諸々賢哲の遺訓及義判を金聲玉振集大成せらるゝと同時に、更に時代の大勢を觀じ人文の推移に鑑みて今後の思想興學の學風に於て新たに後進來哲に道を啓かれましたる明智を承けて我等も亦復皇國文明の道統佛祖附囑の遺法を操守發揚すると共に、更に大いに高く深く、泰西の哲學宗敎等道德藝術等又政經治法等彼土獨得の民族的地盤と歷史的背景との裏に於て發生展開したる精神文化思想文物をも開顯して東西文明の融合統一の道程に大なる一歩を進め、名實共に此の光輝ある天業の祖國を我が一身双肩に擔つて立つ然り恩師の學說法燈を嗣いで立派に傳燈の弟子として斯敎斯道を任持して立つ覺悟でございます。私達が法を弘めるといふ事は思へば又先生の高き厚きお功德を廣く世人をして知らしめ祖國及文明の否自らの恩人として覺らしめ以てよく彼をして道に入らしめる所以の事なのでありまして之先生のご恩の萬一に報い參らす所以であり、愛に滿つて古往今來佛敎文明の聖賢日蓮聖人等本化の菩薩法華經のご恩天地社稷父母衆生の恩、然り而て是實に久遠劫來常恒の化益の大事因緣止み間も無く我等を慈しみ護り惠み悟らしめ給ひゐたりし給ひゐる　大恩敎主釋迦牟尼如來の今尙あつき大恩に報い參らする事でございます。世尊のみむねに答へまつる事でございます。正法傳燈發揚宣布　國體擁護皇威顯彰我等が此の事先生どうぞ安心して下さいませ。微衆三寶の哀護照覽必ず感應ます事と信ずるのでございます。

先生のお顏を拜見致します每に、お歲をお召しなさいましても尙髮髮たるお姿を見て嬉しき涙に暮るゝのでございますが私達は誠に私達の命を一分耗り減らしてゞも先生のお命をお延ばし申さむ事を念じてゐるのでございます　どうぞ先生益々おからだをご丈夫になさいましてまだ尙永く私達を利導啓發して下さいますようよう　さうして我等は莞爾として世尊

のみ前にほゝ笑み立ち其のみ手もて頭を撫でられながら安祥としてみ法を弘め教を說き竟に此功德を以て先生も我等も師弟偕に俱に靈山に往詣で無上勝妙の佛身を成就せむことを祈り參らする次第でございます

之を以て私達の恩師先生に捧ぐるお喜びの辭と致し謝恩誓願の覺悟と致す次第でございます。

南無妙法蓮華經

昭和戊辰太呂和五夜妙滿寺にして祝賀の席上　恩師に陳べ參らせたりしを、越て十參日より一七日の間十四日十五日十六日十七日十八日十九日この日浮雪靈光のあした

洛の東北
比叡の嶽の雄默の教を聞きつゝ

覺雲洞の書房にしるすと
云爾

× × ×

末法の佛教

會費（一ヶ月　半ヶ年　一ヶ年）
（送料共　同　同）
貳拾錢　七拾貳錢　壹圓四拾四錢

末法の佛教は大聖人の御魂の叫のそのまゝです。この叫びにお互は覺醒し精進して眞の生の喜と幸福とを味ひませう。

この意に於て皆樣に末法の佛教を御勸めします。

一、大聖人御遺文を毎月發行するのです
一、文体は全部かなが付て居ります
一、難解の文には略註があります
一、毎號聖蹟か聖傳か聖筆の寫眞が入れてあります
一、實費で御分ちするのです
一、見本御入用の方は金十錢封入御申込み下さい

申込所

東京淺草清嶋町
統一閣圖書部
東京四谷南寺町法恩寺
御遺文普及部
東京神田三崎町二ノ二
振興社
振替東京五六一〇二番

知法思國會第三回懇談會

曩古の御大禮諸儀も瑞雲靄き感激と萬歲に奉祝し納むるの秋、知法思國會第三回の懇談會が神田一橋學士會館で意義深くも左の順序に依つて開催された。

日時　十二月一日土曜日午後五時
講演　露國の現狀に就て　騎兵大佐　橋本虎之助氏
會食　午後七時
懇談　御即位勅語に對する各自の感想

來會の諸氏（いろは順）

井上　清純氏　岩野　直英氏　井上　一次氏
井上道太郎氏　磯部　滿事氏　橋本虎之助氏
本多　日生氏　貫名　日靖氏　小原　正恒氏
荻野　慶三氏　梶木　顯正氏　加藤　唱堂氏
田中　道爾氏　永井　省三氏　永井　米藏氏
中村　清一氏　山田　英二氏　松本　有信氏
小西　日喜氏　寺澤　萬三氏　佐藤鐵太郎氏
佐藤梅太郎氏　坂本　泰造氏　三吉　顯隆氏
柴田　一能氏　釋　直　誓氏　鈴木　日雄氏
鈴木文二郎氏

定刻に到り　本多殿下の御紹介で、橋本大佐は愛て用意された統計圖を以て、謹嚴な威容を壇上に示され約二時間に涉つて、露西亞の經濟、政事、教育、交通、道德、文化等及び其終來に對して迄も明晰に縷述され、共產主義を實行した曉には斯の如きものであると永き御躬驗と廣い御見聞からの講演は極めて有益で、多くの人の知り度い處であるから最近其速記錄を揭載する事として、此處には、異體同心、私氣萬々の中にフォークとナイフが動いた後の懇談、御勅語に對する感想の概略を載錄しておく。

岩野幹事の挨拶に先づどうか、本多殿下よりお始め下さいとの事で、殿下は數日來の御不快で在らせらるゝにも不拘平素の快辯を以て、私は丁度先月十日の夕刊で、御勅語を拜し非常に難有く感じまして直ぐに繰返し繰返し拜讀するばかりでなく、之を漢文に書き換へて見たりして愈深く肝銘した次第であります。申す迄もなくかの　御勅語は明晰に大切な事柄をお示しになつてゐますが、今是を四段に別けて述べますると、第一段は其使命と國躬に就て仰せられ皇祖の一系無窮に紹で使命を明かに遊ばし國躬の尊嚴なる內容と共に天業を經綸する使命をお宣べになつたのが肝心であると拜します。第二段は聖德と國民精神の隷屬との點で「國ヲ以テ家ト

爲シ、民ヲ視ルコト子ノ如シ」と義は君臣で情は父子を示され「仁恕ノ化、下ニ洽ク、敬忠ノ俗、上ニ奉ジ」と列聖の御高德と國民の精華を相互的にお示しになり「君民休ヲ一ニス」で同休一心であるが、御皇室が國家に先つて現はれ、秩序整然としてゐる「是レ我國休の精華」として難有く感じます。第三段は、維新と政治の中心が仰せられてゐる、是を拜しては皇室中心が益大事であり、國民各自責任の分擔が大切であることを深く想ひます。第四段には國民教化を仰せられた、「教化ヲ醇厚ニシ愈民心ノ和會ヲ致シ」とあります。從來の御勅語には教育を重じとか、產業を興し等の方面が多かつたが此度始めて教化と有ます、政事政策の上に教育と宗教と倫理、道德と今日の民心惡化には色々講じても遂には宗教の教化を重んじ、內容を精撰して行くより外はないこれは議論の餘地ない事であります。難有いことには此　御勅語は內閣が交送しても夫れに依らず此　聖旨のある處を奉躬し動かすことなく一貫して教化を熾ならしむることが最も必要な事と思ふ。其の事實の具体化した一部が此度宗教に從事してゐる者十三四人が表彰されました、それは聊か社會に謁した功勞に酬いられたもので、本日　天祈授與式が行はれ、自身も參りましたが、其時當局の話には褒賞條令に依るものではない、勳章と同樣の意味であるから宮內省に廻つてお禮を言上なさるが宜しいとのことでありました。呼出されたものは神道、基督教及び佛教の者で、僧としては今日自分一人で、ありましたが、宗教の爲めに盡した事に對して論賞された事を喜ぶ者であります。

義には文部省が表彰狀と硯箱を下賜されましたが、社會教育の功勞で、上に於て教化を重んずる主旨の顯はれたものは身にとつて誠に難有く思ひ、將來も益發揚を望む者であります。

次で加藤先生は、私は　勅語を拜しまして色々感じましたが不圓　明治天皇を神武天皇に、昭和の帝を崇神天皇にとの心持ちが致ました。教化の文字が勅語に出てゐるのは崇神天皇の「民ヲ導ク本ハ教化ニ在ル也」とあるのが始めのやうに思ひます。此教化の文字は深い意味が籠つてゐる、單に教育ではない外國語に飜譯するにも適當の語はないエデュケーションでもカルチュアーでもない。教とは有意識的に用ゐられ、化は無意識が含む、禮記にも教化の文字はあつたが、佛教では熾んに之を用ゆる、化の字は道德的、宗教的感化が多分に含まれてゐる、教化と和會は日本の今日必要なばかりでなく、世界的に必要である。中世の西洋思想は傳統的であつたが近代は理智である、智は悲の上に築き上げるが必要で教化は特に醇厚の情的意味が深く拜察さるる。「民心の和合」は世界的に必要で、和合の根本は教化であると明かにお示しになつた事は教育でなしに感化を力强く感ずる次第であります。

今一つ申してみたい、是迄は「爾臣民」とあるが、今回は「有衆」とある、臣民と有衆の異解はどうか、これは日本人丈けでなく、世界の人類にもと解したいのですが、どうか諸賢の御賢示をお願ひ致します等々。

其時に　佐藤閣下は、私の思ふに有衆の有は意義がないそして衆は大勢のものといふ位に解してはどうでしようかと申される。一同も要するに臣民よりも有衆の方が溫情の籠つたお言葉で、親し味深く感じますに同感であつた。

やがて　小原閣下は少々急ぐ用があるので一言させて頂きますと語り出されたのは、御勅語第二項の「君民躬ヲ一ニス」これが最も尊く思ふ、義は君臣で情は父子、明治十五年軍人御勅諭にも「朕ハ汝等軍人の大元帥ナルゾ、サレバ朕ハ汝等ヲ股肱ト賴ミ、汝等ハ朕ヲ頭首ニ仰ギテゾ其親ミハ殊ニ深カルベキ」と、頭と手足の關係で　御歷代が神代からの傳りをお示しになつた、此點を國民がよく思ひ起して忘れなかつたらば、何事も問題はない、首領を殺ねれば人身は滅亡するは當然の事で國民は必ずこれを頭に入れておくことが大切である。次に第四項の「私ヲ忘レ公ニ奉ジ」これが誠に大事で今日の政治がうまく行かないのは私が初めになつて、公が去つてゐる。私と衆とを同一にしてゐるものが多い、私を營んでしかも公とするはよくない、私を去らば凡て公平となる。元來八といふ字は二でも四でも公平に割れる數で、ムの字は私といふ字であるから、それがわが積む德を累るのが公となつて出來た字ですから、釋尊も、今迄お積みになつた功德の六十四分の一、二分とられて、餘の六十二三分を公平にお分ちになつた。公は私を去つて功德を大勢に與ふることですから平素の道德心が皆一般にそうなれば世の中は圓滿であると思ふにつけても益此御勅語を難有く思ふ。これで私は御免を蒙ります。

次に岩野閣下起つて、此勅語を本會が拜したと考ふる時に、思國會も創立以來既に三回の懇談會を重ね各講師のよいお話を拜聽し、吾々としては實に幸福で、懇談會の意趣は至極結構な事ではありますが、之れ丈けでは果して此　御勅語に協つてゐるかどうか。お互は此の會合で向上進步するであろうが、それ丈けでは滿足でない、一番奮起して行かねば此儘では御勅語に對して不充分ではありますまいか。創立の時の相談は教化と和會であつたから、此儘では相濟まぬ、どうしても宣傳に進むことが本式と思ひます。現在は其都合になつてゐないのではあるまいか、一日も早く運動を起さねばならぬ。どうか皆樣のお力で其機運に向ふやうにお願したい、此勅語を拜して大に責任を感じます、と萠ゆる希望を吐露された。

次で　佐藤閣下は、私のお勅語を拜した時の心持ちをお話

し申せば、京都にゐまして、其時の感じは何共云へない難有い感じと、長れ多いが我意を得たりと想ふと同時に此御勅語は果してどうなるかと感じました。昔から又明治時代からも澤山御勅語は頂いてゐるが國民が殆んど之を色讀しない。明治大帝の御崩御の前に統一閣で　本多総下等と御新念申上げた時と同様の感じであつた。甚だ不祥ではあるが是好良藥を服せずと自分は感泣した事があつた、其後に難有い仰を　先帝からも　今上陛下からも屢頂いたが、しかも一つとして世上に現はれない。或は此御勅語も紙一枚となつてしまはぬであらうか、此をお護り致しますと誓も起てられない、是が果して紙となつて難有い思召しが通らねば泣くがよろしい、とても此通りには行くまい、かの憲法御發布の時御告文を拜したが、それに仰せ出された御趣旨通りに政治向は行はれてゐない。あの時は國民の態度今日あるを以て仰せられたのではない「我臣民ハ即祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シソレ朕ガ意ヲ奉体シ、朕ガ事ヲ奬順シ、相與ニ相衷協同、益我帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ、祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同タシ、此負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ザルナリ」と仰になつてゐる、萬機公論を惡用する今日の憲法の解釋が間違つてゐる證明はあの御告文「皇祖皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニシ典憲ヲ成立シ、條章ヲ昭示シ、内ハ以テ子孫ノ率由スル所ト爲シ、外ハ以テ民臣翼贊ノ道ヲ廣メ、永遠ニ遵行セシメ、益國家丕基ヲ鞏固ニシ八洲民生ノ慶福ヲ增進スベシ、乃至、惟フニ此レ皆、皇祖皇宗ノ後裔ニ貽シ給ヘル統治ノ洪範ヲ紹述スルニ外ナラズ」と仰になつてゐるでないか。そう考へると此御勅語は實に力强い。只今岩野閣下の御說は同感で微力を盡して此御趣意を休し勵ばねばならぬ。御勅語を拜すると其お心持ちは我國文明の本源が明かで則ち情を以て一貫された事を拜します。私達お互は一家のやうに考へて誓じく致さうではないかといふ温かい、心地を貫徹するならば此聖意が通つたのではないでしようか、西洋式の浮華輕佻を誡めになつたとお思ひ、權利義務でなく、何事も要求でなくて感謝報恩の念で行くがよいと思ふ感じがしました等々々

懇談は夫から夫へと進展した、そして本會の目的達成に關しては、又教育家とも大に提携することに就ての相談もあり、宣傳に對する立案等種々有益な談合に思はず時を過ごし十時十五分名殘り惜しく散會した。

教報

報恩閣の開堂式と國綱會

帝都の區劃整理は遂に淺草區新福井町、顯本宗學會にも及ぼした。大正十二年九月、かの大震大火の厄に遭つた本會堂は直ちに假建築が出來て益發展してゐたお、義に法運の興隆と共に理想の新館を建設さればとの方針で準備されてゐたから、昨年七月末に移轉命令を受けても待おれりとばかりに積極的躍進することを悅んだ。或者は此機會に適當な處に移轉して大擴張しやうといひ、或者は懷舊の地を弊履の如くに捨つべきでない、歷史は可成保有すべきものだとの二說あつて結局後者に決定した。

抑も顯本宗學研究會は今を距る三十餘年、即ち明治二十六年正月、雪の降る寒空に、本多貶下と下妻氏等で今の地を撰定され、同年六月十五日盛大な開堂式が宗門革新の正師に依つて慶修されて以來、會堂としては五十坪の貧弱でも、法義の確正、主張の明徹、知說の實踐に到つては古今獨步の靈場で、爾來小林日至上人二十年の御奮闘、山名日宗上人小西日喜上人と法統繼承され愈愈大に向つた此不思議の本會は歷代特色ある名僧碩德を迎迎する、それは先師修功累德の餘慶であらねばならぬ其創建當初を懷想する者は、誰か熱血湧躍、紅涙滂沱たるを覺へぬ者あろう。

「根深ければ枝繁し」と、今日の隆昌を見聞するにつけても先師を偲ぶ、

日蓮門下は特に知恩報恩なかるべからずである、故に新會館をば「報恩閣」と命名された。

昭和三年八月十二日上棟式を擧行し、其工事は熱誠な白石組に命じ、特に老練なる德石政太郎氏を工事監督として進行した結果、些少の支障もなく極めて具足完全平和に本建築が竣成した。しかも時、宛かも曩古の御大典に天下普く萬歲の詔音に浴する菊月、それは月こそ六と十一の異はあれ吉しと同じ日の十五日に、總裁大僧正聖應院日生貶下御親臨のもとに、先住小西師始め、鈴木、木村、田久保等十餘の大德諸師御臨場あつて開堂式並に奉祝國綱會が最修され、來り會する者約三百名堂に溢るの盛況、午後二時修法は始まりやがて日生貶下の左記慶讃文御親讀に次で、統一國本部岩野閣下　市川立正會館小澤氏、日暮里顯仰會鳴谷氏　横濱法華協會磯部氏、及び釜山天晴地明會坂上氏の祝辭、全國各地寺院教會所住職よりの祝電祝辭の幾十を山田氏敬讀され、引續いて國綱會に移り、別記　貶下の新願文は音吐朗々時間に徹した。

大法要後、直ちに横山理事より建築經過報告おあり引續いて、本多總裁は「四恩報謝」と題し、報恩の二字に就て人は報恩に感激し感恩の行德が一番貴い。依賴、要求の信心よりも三寶の鴻恩に感謝の信心が貴い、生活は報恩が元となるとて經文や聖語を御引證なさつて四恩の尊重から報謝信心の大切なことを御縷述され滿堂、特に意義深く感銘した。最後に山口主任講師の謝辭で式は閉された。やがて開經に入り午後七時三々五々嬉々として法悅に浸びつつ散會した。

慶讃文

謹奉勅請本門常住の三寶護法護國の諸天善神來臨影響悉知照覽あらせ給へ

昭和戊辰十一月十五日顯本宗學會の會館新築落成開堂供養の式を擧ぐ　抑も我が顯本宗學會は法華本門の大教に基き正法正義を擁護し

宣揚する道場にして創立已來實に三十有餘年を經過し日至上人以下山名小西兩師の傳承を經以て今日に至り信徒の熱誠念加り益に完備せる會館を建造するを得たり　法悦歡喜之に過ぎたるは無し　正法値ひ難く正信獲難し我等俗俗此の難値の正法に値ひ難得の正信を得たり盲龜の浮木に値へるが如し　願くは此會館落成開堂を一區劃として更に各自の信解を增進し護法布教に努力し本會館建造の目的をして益有効ならしめむことを

慶讃文仍て一章如件

大審正聖應院日生　敬白

祈願文

今上天皇本月十日即位ノ大典ヲ擧ゲ　聖旨ノ在ル所ヲ我等國民ニ告ゲ給ヘリ　天業經綸ノ天職　實祚無窮ノ國體　仁恕ノ聖德敬忠ノ美俗是レ我カ國體ノ精華ナルコト維新ノ宏圖立畫ノ遺獻是先帝ノ遺緒ナルコトヲ示シ給ヒ更ニ告ゲタマハク　朕內ハ則チ教化ヲ醇厚ニシ愈民心ノ和會ヲ致シ益國運ノ隆昌ヲ進メンコトヲ念ヒトアリ　此ノ聖旨ハ我等ノ特ニ奉戴スベキ所ニシテ我國ノ現狀ニ在リテ教化ヲ重ンジ民心ノ和合ヲ期スルハ最モ緊要切實ノ事ナリト示サレタルモノ從來教化ニ專心セル我等ノ感激措カザル所ナリ　一度此　聖勅出テ我國ノ時勢ハ匡教セラレ國體益尊嚴ニ　皇風愈發揚シ民心ノ敬忠社會ノ美風是ヨリ盛ンナランカ　願クハ三寶諸天善神願ニ加シ冥ニ應ジテ實祚愈堅ク國運大イニ進マンコトヲ　茲ニ大衆ト共ニ至心ニ祈願シ上ル感應道交アラセ給ヘ　南無妙法蓮華經

和昭三年十一月十五日　大審正日生　稽首

京都教報

題本山妙滿寺に於ては曩古の御大典に付左の如く奉祝大法要等を慶修せしが頗る盛況を呈せり

○御大典記念講習會　は十一月自一日至三日毎日午前九時より午后三時迄開催す　▲思想國難と宗教々化　井村管長猊下　▲本尊の意義　能仁監督布教師　▲英國人の國民性と其愛國心　大審院判事大森洪太氏　▲思想國難の主要なる原因と其救治策　京大教授青柳榮司博士　▲共產黨事件取調の內容に就て　京都府特高課長上田誠一氏　▲思想問題に就て　陸軍少將四王天延孝氏

○御大典記念大傳道　十一月一日夜講堂に於て開催す　▲師壇にして道尊し　鵜澤泰溫師　▲佛教徒の願行　高木日靖師　▲思想國難と佛法の維新　紀野俊耀師　▲御大典奉祝の道　能仁監督布教師　同月二日夜　▲求むるなきの努力　兒玉日見師　▲昭和一新　栗原顯有師　▲大盛典を記念して　吉永日洋師　▲思想國難に面して　井村管長猊下

○御大典慶讃音樂天章大法要　は十一月四日午前十時より管長大審正井村日誠猊下導師の下に全國各布教區代表僧員五十有餘名來列し莊嚴極まりなき大法要を親修せられしが參詣者滿堂立錐の餘地なくいとも盛大なる法要なりき　（疑陽）

大阪教報

十一月六日大紙倶樂部にて御大禮奉祝講演會開會の辭京藤師昭和聖代の新宗教と武田部長自他救濟の力行松本部長思想國難に直面して井村猊下　八日蓮成寺にて立正安國論講義上田師　二十二日堂關寺にて日蓮聖人御會式を蓮修後北陸を巡りて京藤師日蓮聖人の大恩村岡師皇恩無窮熊井特命布教師　二十三日蓮成寺にて御會式を修し久遠の靈光村岡師報恩謝德上田師佛の大慈悲吉塚師日蓮聖人を偲びて有田師　十二月四日婦人會法華の修行に就て本多猊下同夜大紙倶樂部にて御即位の勅語を拜して本多猊下　八日蓮成寺にて婚禮と佛教和井田氏日蓮聖人の主張京藤師立正安國論講義上田師佛何れも頗る盛會多大の効果を奏せり

十一月七日夜　郡山市道路布教
出演者　中島元道師　荻本量義師

十一月十二日晝　盛岡法華寺奉祝會慶修
精神的の奉祝　中島元道師

十一月十二日夜　盛岡法華寺御會式擧行
信仰の價値　中島元道師

十一月十三日晝　盛岡法華寺御會式修行
信仰の力　小原通勝師
日蓮聖人を憶ふ　中島元道師

十一月二十三日夜　二本松町本久寺御會式修行
誠の心　荻本量義師
事の一念　中島元道師

十一月二十四日晝　二本松蓮華寺御會式修行
信の一字　荻本量義師
迴向文玄義　中島元道師

十一月二十四夜　二本松町蓮華寺御會式修行
日蓮聖人の生涯　荻本量義師
誠の一念　中島元道師

◉知法思國會本部は東京市淺草區北清島町十四番地に設置せられたり事務は同所にて取扱ふ。
振替口座番號は東京五九一二二番（電話下谷一九〇一番）

目次

日什大正師の略歴及主張……本多日生
法華經の一偈一句……本多日生
教報……

第三十四年二月號

社寺建築
設計監督及臺灣檜材の安價提供
（三年以上水蓄乾燥材）

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及內務文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候
（充分なる水蓄乾燥をなしたる臺檜最も優良なるも水蓄不充分なる臺檜は干割狂ひ等の缺陥多きものであります）

臺灣檜材ノ六大特徴
一、耐久防腐
二、蟻害絶無
三、香氣清楚
四、木質堅緻
五、理路整然
六、木高雅包

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地
（明治神宮外苑內日本青年館正門前）
社寺工務所
（電話青山六〇二八番）
神奈川縣鶴見町
社寺工務所鶴見支所
福岡市外堅箱町馬出松原
社寺工務所福岡支所
（電話二二三〇番）
大阪市西區市岡町七十九番地
社寺工務所大阪支所
（電話西三二二四番）

統一定價

一冊	金貳拾錢	送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共前金之事
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

統一廣告料

表紙一頁	金貳拾圓	前金之事
半頁	金拾五圓	
四分一頁	金九圓	
五圓		

昭和三年十二月廿四日印刷納本
昭和四年一月一日發行（第四百六號）

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人 小林順義
印刷人 鈴木日雄
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地 都印刷所 電話高輪六〇二四番

不許複製

發行所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地 統一發行所 振替東京五一〇七一番
編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ